
月島神子は覗いている

椎名 紘之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月島神子は覗いている

【Zマーク】

Z0335Z

【作者名】

椎名 紘之

【あらすじ】

高校受験を控え、近所の神社に合格祈願へとやってきた橘京介は、雪に埋もれた境内が荒廃していることに気づく。なんとそこは廃神社だったのだ。仕方なく参拝を済ませ、早々に神社を立ち去ろうとする京介だったが、ふと背後から声がする。不審に思い拝殿の中を覗くと、そこには鏡の中に住む不思議な少女がいた。

昔から人よりは信心深かつた。でも特定の神様を信じていたわけじゃないし、昔から神と聞いて思い浮かぶのはジーザス・クライストでもブッダでもなく、雲の上に乗った白ひげのじいさんだった。木の杖を持ち、頭に黄色い輪っかをつけた安っぽい神格像は、あくまで子供時代に形成された漠然としたイメージであつて、実際に存在するどこの宗教の神でもない。

本当の神様はじいさんでも坊さんでもなく、どににでもいそうな少女の姿をしている。俺がそんな突飛な事実を知つたのは、高校受験を間近に控えたある冬のことだつた。

「お願いしますッ！」この橘京介めたちばなきすけをどうか星条学園せじょうがくえんに合格させて

下さい！」

賽銭箱の前で強く目を閉じて、大きな拍手を一度鳴らすと、静まり返った境内に乾いた音が響いた。願いを込めた反響音が、しんしんと降り積もる雪に吸收され、溶けていく。今朝家を出たときはそこまで寒くなかったが、なるほど母の忠告は偉大だ。辺りは思つたよりずっと肌寒く、吐く息は絶えず白かつた。素直に手袋やマフラーをしてくればよかつた。

かじかんだ手をさすり、目を開けた俺は、ふといくらか参拝の手順を間違えていたことに気付いた。何か物足りないとthoughtていたが、鈴を鳴らしていない。あのジャラジャラという甲高い音がなければ、せつかくのお参りも台なしだ。梅干のない梅おにぎりみたいなもんだ。

「……あれ？」

だが天井からぶら下がる綱に手を伸ばした俺は、上を見て動きを止めた。鈴がない。神社といえばお決まりの大きな鈴が、根元からなくなっている。というより、初めからそこに鈴なんてなかつた。それどころか、拝殿そのものがどこかボロ臭い。

改めて周囲を見回してみると、他には一切人影がなかつた。受験シーズンを控え、この時期はどこの神社も少なからず盛況なはずだが、参拝客どころか管理者も見受けられない。周りを原生林に囲まれた敷地内には、猫の一匹もいやしなかつた。

「まさか、そんな……」

苦笑い混じりに、もう一度神社全体を確かめてみる。建築物にも石畳にも雪化粧が施され、わかりづらくなつてはいるが、境内はすこぶる荒れ果てていた。

ここには廃神社だつたのだ。

「い、いくらなんでも不吉すぎる」

そもそも俺がこんな郊外のうらぶれた神社を訪れたのは、先程も言つたとおり高校受験の合格祈願のためだつた。人混みが苦手で、街の大きな神社を避けた俺は、下見の際に偶然見つけた、この月島つきしま神社じんじゃにやつてきたのだ。

先日の進路相談、担任から「合格は絶対無理」のお墨付きを貰つた俺は、はつきり言つて途方に暮れた。諦めずに勉強すれば何となると信じていたが、いささか一年だけの勉強では足りなかつたようだ。それだけ星条学園のレベルは高い。

ならばいつそのこと、神に頼んでみることにしたのだ。

どうせなら奇を衒おう。有名な神様ではつまらない。正体の知れない神の方が、大穴狙いには適している。さすがに廢業済みとは思わなかつたけど。

「ま、いいか」

むしろ清々しい思いを抱えながら、俺は拝殿を後にした。どうせダメ元。あとは気まぐれな神様が、願いを聞き届けてくれるのを待つだけだ。

「いいかではない おぬし、何か大事なものを忘れておらぬか?」

聞き慣れぬ少女の声に、俺は思わず振り向いた。

だが誰の姿もない。相も変わらず、そこには寂れた廃神社があるだけだ。しんと静まり返つた境内は、どこか神秘的である。

「耳鳴りかな、勉強のしすぎだな、うん」

自分を納得させて、俺は再度踵を返した。すると

「耳鳴りではない！ それにわざわざわらわの力添えを請いに来る
ぐらいだ。どうせそこまで勉学に打ち込んではおらぬのだろう…」

また少女の声だった。確かに聞こえた。どうやら気のせいではな
い。

「誰だかわからないが、姿を見せる… そんなに勉強してないこと
を見破つたのは褒めてやる！」

調子を合わせて俺は叫んだ。大方近所の子どもがふざけているの
だろう。いくら受験間際でピリピリした時期とはいえ、いたいけな
子供をあしらうほど落ちぶれちゃいない。

今一度周囲を警戒したが、目立つ場所に人影はない。そこで俺は
ピンと来た。だだつ広い境内。人が隠れられるとしたら拝殿の中し
かない。

「見破るなど造作もない。何しろ私は神なのだからな」

少女は得意げだった。どうやらこれは神様ごっこらしい。

「その神様ともあろう御方が、いたいけな中学生を寒空の下に引き
止めてどういうつもりだ！」

さすがにちょっと凍えてきたので、俺はやや早口で返した。鼻水
をすする。帰つてすぐ風呂に入らなければ風邪を引いてしまう。

「どういうつもりとはこっちの台詞じゃ！ そなた、参拝したのに
も関わらず賽銭を入れてないであろう…」

言われてみて俺ははっとした。祈願だけはきつかり済ませたが、
確かに賽銭は入れてないような気がする。

「悪かった！ 順序が逆になつたが、賽銭は入れる。これで勘弁し
てくれ」

俺は財布から五円玉を取り出して、賽銭箱に投げ入れた。カララン

という寂しい音が古い木箱に吸い込まれる。こんな廃神社で回収さ
れることもないだろうが、一応神事であり、礼儀だ。

そこでふと、俺は少女の正体を突き止めたい衝動に駆られた。

束の間的好奇心。それにこの寒さでは、中にいる少女だって風邪を引いてしまう。気付かれぬようゆっくり拝殿の戸に手を掛けて、俺は思い切りよく扉を開けた。

「……あれ？」

だが、そこには誰もいなかつた。

四畳半もない狭い空間に埃臭さが充満している。神具もしめ縄も何もない伽藍堂な内装は、今や完全に廃墟と化していた。所々床が抜け、壁にも穴が空いている。

「誰かいないのか……？」

そろそろと辺りを確認するが、入っ子ひとりいやしない。人が隠れる場所もない。

だつたら一体、どこから声がしたというのだろうか。

場所が場所だけに、ヒヤリとするものがあった。打ち捨てられた神社。そこにセンセーショナルな事件でも捏造してやれば、心靈スポットとして持て囃されるのもわけないだろう。

「……ひょっとして、既にそうなってる？」

つぶやいて、一層ぞくりとした。言わなければよかつた。言霊反対。俺は何もなかつたことにして、踵を巡らせる。あとは石階段の下へ向けて、猛然とダッシュするはずだった。こんな気味の悪い場所とはおさらばだと。

だがそれはできなかつた。それまで確かに開いていたはずの戸が、ひとりでにピシャリと閉まつたからだ。

閉じ込められた……？

「うわああああ、助けて神様あ！」

神頼みにはこれ以上ない場所で懇願しながら、俺は戸口に手を掛けた。だがびくともしない。まるで不思議な力で押さえつけられているようだ。

「失敬な。まるで人を悪霊のように……だからわらわは神だと書いてあるだろう！」

背後から響いたのは、あの少女の声だった。もちろんそこには誰

もない。

だがよく見ると、床に一枚の鏡が落ちていた。決して靈験あらたかともいい難い、端のかけた丸鏡。台座も何も付いていないが、置き忘れられた神具だろうか。しげしげと見つめていると、近くで少女の溜息が響いた。

「ようやく気付いたか……といつかそなた、やつと賽銭を払つたと思えば今度はいきなり拝殿に入り込むとは、とんだ罰当たりな人間だな」

なんと声はその鏡から聞こえていた。まさかとは思つたが、紛れもなく鏡から声がする。

警戒しつつも、俺はその鏡を覗き込んだ。本来ならば、不審に満ちた俺の顔が映るはずだ。平均的な身長。黒髪でやや田つきの鋭い、どこにでもいそうな少年。それが俺、橘京介であり、毎日見続けたその顔を見間違えるわけもない。

だがそこに映っていたのは、見知らぬ栗毛の少女だった。

ゆるふわな長髪を背中に垂らし、ペルシャ猫のような目を湛え、きゅっと引き締まつた鼻をした美少女がこちらを見つめていた。細身に可愛らしい白のツーピースを着こなし、頭には花柄の髪留めがついている。よくある女子高生の私服姿といった感じだった。

あらかじめ言つておくが俺は紛れもなく男子であり、ついでに言うと女装癖もない。今日の服装は男物のダブルコートだし、髪だって男としては平均的な長さだ。そもそも俺はこんな美少女なんかじゃない。

「なんだ……これ」

鏡の中は部屋になつていた。畳敷きの和室、と言えばいいだろうか。ここから見える三方の壁に扉はなく、畳わずか一枚分のスペースに彼女はいた。その中心に炬燵があり、彼女は炬燵蒲団の中に半身を埋めている。炬燵のあるのは、茶色の木製容器に入った蜜柑と、質素な湯のみが一つ。それとテレビのリモコンとゲームのコントローラーだった。隣には小さなテレビがあり、そこから伸びた

「コードがゲーム機と繋がっている。正円における中高生の部屋を如実に連想する部屋だつた。

わけがわからず呆然としていると、少女が体を前に乗り出した。
「そなた、高校に合格したいのだろう？　これも何かの縁じや。その願いを聞き届けてやるつか？」

嬉々として少女は言った。少し偉そうだが、活発で心地のよい声。
「な、何言ってんだよ。というかそこは何処で、お前は誰だ……？
どんな仕組みでそうなってるんだ？」

呆然とした気持ちを通り越して、俺は矢継ぎ早に訊ねていた。あまりの出来事に気が動転していたのかもしれない。

「……だから、先程から神だと言つておるだろう。なんべん言わせる気だ」

呆れ顔で、彼女が溜息をつく。それから彼女は炬燵の上の蜜柑に手を伸ばし、ヘタから親指を突っ込んだ。

「神つて……お前が？　イメージとかなり違つんだが……なんかずいぶんと今時の女の子だし……」

「今時で悪いか？　神とて、今時の流行を掴まねばならんのだよ。
それぞれ時代のニーズとやらがあるから」

「ニーズて……」

ずいぶんと突拍子がない（自称）神様を観察しながら、俺は至極当然な結論に至つた。

「これは夢だ」

きっと現実世界の俺は勉強の途中で居眠りしてしまつたんだ。早く起きないと。今日は近所の神社にお参りするんだからな。

「夢ではない、現状把握能力に難儀のある輩じやのう」

皮を剥いた蜜柑を可愛らしい口に放りこみ、何度もぐもぐ言わせた後、彼女はそばにあつたテッシュで鼻をかんだ。

「そなた、星条学園に合格したいのだろう？」

「なぜそれを！？」

「先程熱心に祈つておつたじゃろうが。確かにあそこは名門だ。今

までの学校に合格したいと祈願した生徒は、万を下らぬであろう。しかし、その全てを合格させるわけにもいかなんだ。何せ人間世界には枠というものがあるから。わらわのように唯一絶対の存在であれば楽なのだが、多数に分けて創つてしまつた以上、神の側にも負い目はある。こんな辺鄙な場所で祈願した人間も久しぶりだ。どうだ、その願い、叶えてやらんこともないぞ？」

不敵に笑つてみせた少女は、今度はゲームのコントローラーに手を伸ばした。ずいぶんと落ち着きのない子らしい。

「叶えるって……そんなことができるのか？」

どうせ夢の中の出来事。いつ醒めるともわからないので、俺は話に乗ることにした。もし正夢にでもなれば儲け物だし。

「当然。神の名に賭けて人間風情に誓つてやろつ」

高飛車な態度にむつとする気持ちもあつたが、怒つっていても仕方がない。夢の中であるうと相手は神様。逆らつては罰が当たりそうだ。

「じゃあ、お願ひしてやろつ！」

「……神格に対しても口の聞き方は気に食わぬが、まあよい。ただし条件がある」

「条件つて……さつき賽銭を払つたじやないか！」

五円だけど。

「あれは願いを聞き届けるための交信料であつて、契約料ではない」見たこともないシユーティングゲームをプレイしながら、少女は説明した。

「契約つて　まさか命を貰うとか」

その不穏な言葉に俺は渋面した。願いと引換に魂を売る……寓話なんかでよくある話だ。

「神を何だと思うておる。そうじやのう……無事合格した暁には、わらわの願いを叶えて貰う。それでよいか？」

その提言に、俺は思わず怪訝した。可笑しな話だ。なぜなら

「神様なんだから自分で叶えればいいじゃないか」

創造主たる神が、なんだつてわざわざ人間に叶えて貰うよつた願いがあるのか。すると彼女は複雑そうに柳眉を歪め、コントローラーを炬燵の上に置いた。

「神にも色々と事情があるのだ。そんなことより、願いを叶えて欲しいのか、そうでないのか！」

痺れを切らした子供のように、彼女は俺を睨んだ。鏡越しの世界。少しふくれつ一面の少女は、神様に対して失礼だが、何だか可愛らしかつた。

「……いいさ。合格した暁にはお前の願いを叶える」

半分は乗りで答えたのだが、少女はぱつと表情を明るくして立ち上がつた。

「では契を」

彼女は神妙に向き直り、鏡に向かつて手を当てた。

「契つて……」

「何をしておる……はやくそなたも手を！」

手の平の向こうから急かす声が聞こえる。何のことかよくわからなかつたが、見よう見まねで、俺は彼女と同じく、鏡の面に手をつけた。

ひやりとした感触。そこに温もりは存在しない。

「これでいいのか……？」

自らの手で鏡を塞いだ形になり、中の様子が見えない。返事がないでの訊ねたが、なかなか少女は答えない。

やがて仕方なしに手を離すと、鏡はただの鏡になつていた。

呆気に取られた自分の顔が写つている。少女も、宇宙も、もうどこにもないのであった。

「そうかこれは白昼夢だ」

夢ではなく白昼夢。なんて便利な言葉だろう。先人の残した偉大な知恵に感謝しつつ、クシャミ一つで俺はその場に立ち上がつた。

その後は特に何もない。帰つてから風呂に入り、底冷えした体を温めた。温めたはいいが、その日の出来事が原因で俺は三十九度の

熱を出し、三日も寝込む羽目になつた。ただの三日ではない。受験生の貴重な七十二時間だ。

全快した俺はその遅れを取り戻すべく、普段より集中して勉強に励んだ。そのせいだろうか。神社であった出来事のことなど、すっかり忘れてしまつていた。

(2)

「我が星条学園は七十年の歴史を誇る名門校であります。新入生諸君はこの歴史と名誉に恥じぬよう」

式典における校長の話というものは中高変わらず長いものなんだなと辟易しながら、着慣れないブレザーに違和感を覚えつつも、俺は壇上の校長を見上げた。五十歳を優に超えているだろう初老の男性だが、雄弁な演説はとどまることを知らない。そのありがたさたるや頭部に後光が差す程だ。

四月、五分咲きの桜がそこかしこに見られるようになつた頃、俺は私立星条学園に入学した。

補欠合格のことだつたが、担任教師の驚いた顔がまだ記憶に新しい。半ば諦めていた名門校への合格に両親は歡喜してくれたし、中学の友人たちも驚嘆していた。

だが誰よりも驚いたのは、他でもなく俺である。

直前に受けた模試の結果はD判定。天地がひっくり返つても無理という程でもなかつたが、正直のところ自分でも諦めていた。

しかし結果は見事合格。どうやら自分でも気づかなかつたが、俺は本番に強いタイプだつたらしい。

努力は報われる。悪は滅びる。満員の環状線も一周待てば席が空く。勸善懲惡的な美德に思いを馳せながら、俺はしみじみと体育館に並ぶ新入生たちの姿を見回した。

「にやけてるよ君。星条に入学できたのがそんな嬉しいかい？」

声をかけてきたのは、隣に立つ男子生徒だった。

男にしてはやけにさらさらとした髪。小柄な顔には胡桃のような瞳を湛え、爽やかな笑顔は愛嬌に満ちている。その端正な顔立ちは一見すると女子に間違えそうだが、紛れもなく彼は男子の制服を着用していた。細身で華奢な体躯のせいかネクタイがよく似合う。おろしたての制服をいとも簡単に着こなしているのは少し癪だが、不

思議と嫌味な感じはない。

「そりや、俺は補欠合格だからな。余裕綽々で合格した秀才たちとはありがたみが違うわ」

いちいち威張ることでもないが、隠す理由もない。それが入学して最初に話す同級生ながら、なおさら胸襟を開く方が得策だろう。

一瞬だけ奇妙な間があつたが、彼はまたすぐに外連味のない笑みを浮かべた。

「ハハハ。そりやすごいね。補欠って確かに一人だけだつたはずだけど、君はよほど運が強いと見た」

「実力と言つてくれよ」

校長の長い話が続く中、一人に静かな笑いが漏れた。

「でも、今からうちの生徒、特に女子生徒をチエックしておくのは賛成だ。七十年とある歴史の中での、僕たちは運のいい星条生なんだからね」

星条生　　まだ実感の湧かない言葉に胸が躍る。しかしふと、彼の言葉に引っかかるものを感じた。

「俺たちの運がいいって？」

疑問を口にすると、彼はきょとんとした表情を浮かべた。

「知らないのかい？　星条学園は長年に渡る男子校という体制から脱却して、今年から共学になつたんだ」

「へー」

知らなかつた。何せ勉強しかしなかつたからな。足りない頭脳では試験以外のこと回す頭がなかつた。

「なら、記念すべき最初の女子生徒を今からチエックしない理由はない。ほら、ぱつと見渡しだけでも妙ちくりんな子たちがいるだろ？　四捨五入すれば一世紀も男しかいなかつた空間にそのうら若き身を投げ込もうだなんて女の子は、妙ちくりんな変わり者ばかりだろうけどね」

「そんなんばっさり言わなくとも……」

苦笑しながら、俺は彼の視線のある方へ目をやつた。確かに、男

子に比べて女子はだいぶ数が少ないようだ。

色々な生徒がいる。みな校長の話に飽き飽きしているのは同じだが、彼の言つとおり中には妙ちくりんな生徒も混じっていた。

他の生徒の注目も集めていたのは最後尾左側、長い黒髪を持つたセーラー服の少女である。セーラー服は、くありふれた女子高生の制服だ。ではなぜ彼女だけが目立っているかというと、先に述べたように我が星条学園の制服は、ブレザーだからである。女子の場合、淡黄色のブレザーに深緑色のチェックスカート。男子の制服も同色の組み合わせだ。だが彼女だけはセーラー服だった。紺色のスカートに白のブラウス。真紅のタイが生徒たちの中で一際目立っている。整列する四百名近くの生徒の中、一人だけ指定外の制服を着ていればそりや目立つ。それだけで目立つのに、彼女はもう一つ、特筆すべき風貌を抱いていた。

「ス、スケバン……」

思わず言葉が漏れていた。

スケバン、それは二十年以上前に流行した不良女子のファッショソンである。その特徴は異様に長いスカートにあり、彼女のスカートもまた床に着きそうなほど長かった。

明らかに時代遅れの風貌。古い漫画やドラマでしかお目にかかるない少女がそこにいた。

合格後に届いた案内によれば確かに指定の制服が必須だつたはずだが、入学初日から校則違反とは度胸がある。

すると偶然、彼女と目が合つた。性格はきつそうだが、よく見るとずいぶん整つた顔立ちをしている。せつかくの機会なので笑顔を向けてみたが、返ってきたのはどぎつい睨み顔だった。

「あの子には近づかないでおこつ……」

気を取り直して反対側、後列の右側に目をやると、堂々と読書に励む少女が目についた。

こちらはちゃんと指定の制服で、黒い三つ編みに眼鏡といった文學少女的な風貌なのだが、なかなかどうして、この入学式という場

をまるで気に留めていなかつた。表紙を見る限りおそらくは古典文學なのだが、尋常じやないスピードで読み進めている。漫画でさえ一冊一時間以上かけて読む俺には理解できない速さだつた。

「なるほど、確かに妙ちくりんばつかだ」

ひとしきり体育館を見渡し、変に納得していると、ようやく校長の話が終わつた。式が終わり、司会役の教師が順繰りに体育館を出るよう促している。

そう言えば、入学式では恒例とも言える新入生代表の挨拶はないのだろうか。新入生代表は大抵、入学試験に首席で合格した人間が務める。こんな名門進学校にトップで合格した奴の顔を拝んでみたかつたのに、残念だ。

「一緒にクラスになれるといいね」

隣の列が指定され、今まで話していた男子生徒もまた歩き出した。

「ああ、俺は橘京介。お前は？」

「よろしく京介。僕は空姫」

何を思つたか、彼は持ち前の爽やかな笑顔で、軽くウインクをした。

「空姫涼子つていうんだ」

「……へ？」

手を振りながら「機嫌なステップで去つていつた彼女に、俺はしばし瞠目していた。

涼子なんて名前は、当然の「とく男子のものではない。
彼女は女だったのだ。

「お前が一番妙ちくりんじやないか」

人混みに消えていく彼女を見送りながら、俺は呆れていた。呆れながら、笑いが込み上げてくる。予感がした。確かに予感が俺の胸に去来する。

これから二年間は、きっと平穀にはならいない。
たぶん、よくも悪くも。

(3)

春の息吹を感じさせる陽気の中、体育館から校舎へと通ずる渡り廊下は、独特の期待と緊張感とで満ちていた。

郊外の山麓に位置するこの学校は、周りが豊かな自然に囲まれ、見渡す限りが森林だ。ふと視線を横にやれば、緑したたる野山が辺り一面に広がっている。

小高い丘に建つのは昔ながら木造校舎。さすがに創立以来同じ建物を使っているわけではないが、最後の改築が今から三十年以上前なだけに、至る所に綻びがあつた。壁のくすみや補修された板張りの床、使い古された下駄箱のロッカー。星条学園はそこかしこに、七十年の歴史を刻んでいる。

体育館から教室に移った新入生たちは、玄関ホールに貼り出されたクラス分けを元に、皆各自の教室へと移動した。途中、例のスケバン少女が教師に呼び止められ注意を受けていたが、見て見ぬふりをした。A組からJ組の十クラスがある中、俺の所属はB組だった。一年の教室は一階にある。二年は三階、三年は最上階となる四階といった具合に、学年が進級するにつれ階も上がっていく。一階には購買部や食堂、特別教室などが位置している　と学校案内に書いてある。

黒板に貼り出された座席表を確認して、俺は教室の真ん中にある席に腰を下ろした。

ざつと教室内を見る限り、男子と女子の比率は七対三といつたところ。なるほど体育館で会つた空姫が言つており、女子の方が少ない。

「まさか、他にもあんな奴はいないだろうな……」

空姫涼子　彼だと思っていたはずの人間は彼女であり、女子だけつた。まんまと服装に騙されたが、さすがにあんな変人は一人だけだと信じたい。

教室内にその空姫の姿はなかつた。変人とはいえ気さくな奴だったので少々残念だが、あいつなら教室外でも普通に話しかけてくるだろう。

それに、これから新しい学友たちとは「まんと知り合えるのだ。勉強についていけるかどうかは不安だが、まあなんとかなるだろ？」なんたつて俺は、本番に強い男だからな！

新生活のスタート。新たな学び舎、新たな学友。俺はクラスメイトと親睦を深めるため、早速隣の席に座る人物に声をかけようとした。

「げえ！」

だが隣にいた女子生徒の姿を見て、下品な声を上げてしまった。

「は？ 何アンタ」

間髪を入れずドスのきいた睨みが返ってきた。

彼女の長い黒髪は鴉羽のように艶を帯び、色白の肌によく映えている。眼光は鋭いが、その瞳には黒曜石のような光沢があった。垢抜けた雰囲気のせいか大人びた妖艶さを持つが、桃色の唇が年頃の少女らしさも添えている。着崩したブラウスからは新入生らしからぬ色香が漂つており、制服越しでもスタイルのよさが読み取れた。百人に聞けば百二十人がそうと答えそうな美少女。入学早々こんな女子生徒に出会えた俺は幸運なのだろう。彼女の着たセーラー服と、異様に長いスカートを除けば。

「……ス、スケバン女」

彼女は体育館で異彩を放っていた、例のスケバン少女だったのだ。よりによつて同じクラス、しかも隣の席とは。

思わず声に出してしまつたが、彼女からの反応はない。真っすぐ前を向いて不機嫌に眉を顰めている。完全に無視されていた。

だが物は試し。俺は空姫の時と同じく、気さくに話しかけてみることにした。もしかしたら尖っているのは格好だけで、中身はいい奴かもしれない。

「奇抜なファッショングだな」

「馴れ馴れしいのよ。話しかけてくんな」

前言撤回。ゾッとするぐらい敵意を持った声色が返ってきた。同じ変人でも、空姫とは種類が違うようだ。

それから間もなく担任の教師が入室し、その会話とも取れないやり取りはあっけなく中断された。

担任の簡単な紹介が済んだ後、ホームルームは恒例の自己紹介に入る。

最初はぎこちなく始まつた自己紹介だが、何人がギャグを交えてくる奴らもいて徐々に場の空気は和んでいった。

「橋京介です。補欠合格だけど入っちゃつたものは一緒になんで仲よくしてください」

無難な笑顔を湛えて、俺は着席した。そのまま自己紹介は後ろに回つたが、ふと隣でぼそっとした咳きが響く。

「どうりで」

「どうりでつて何だよ」

他を邪魔しないよう囁き声で抗議を向けると、彼女はつんとした表情を崩さず妖艶に嘲笑した。

「そのまんまの意味よ」

体育館での空姫の言葉を信じるなら、補欠合格は自分ただ一人だ。つまりこの学校で俺より入試の点数が悪かつた人間は一人もおらず、三大論法的にこいつは俺よりも頭がいいのだ。スケバンなのに、これは悔しい。

「いちいち刺のあるやつだな、お前つて……」

呆れながら述べたその言葉をかき消すよう、彼女は矢庭に立ち上

がり、一言

「乾桜子」とだけ告げてまた着席した。ちょうど自己紹介の順番が

回ってきたようだが、「お前」と呼んだことに怒つたようにも見えた。それ以後はまた澄まし顔で、他のクラスメイトの興味を示す素振りもない。その冷淡な態度に周りは呆気に取られていが、教師に促されて自己紹介は再開された。

桜子……か。確かに美人だが、桜って感じはないよな。少なくとも僂げな感じではない。

そんなことを思いながらなんともなしに彼女を見ていると、またもや凄い形相で睨まれた。

「わかつた……もう話しかけないよ」

完全に人を寄せ付けない態度。ここまでされるとお手上げだ。隣人としての友好関係は築けそうもない。

「君、度胸あるねー」

肩越しの声に振り向くと、後ろの席の男子が感心した面持ちを向けていた。

さつぱりした髪に、女子受けしそうな容姿。男子にしては低めの背丈。彼の右目の中には泣きぼくろがあつた。名前は確か。

「天野だよ。天野翔。あまのしょうもう忘れたのかい？ 今紹介したばかりなのに」

わずかな沈黙でそれを察してしまったのか、彼は不平がてらに本日一度目の自己紹介をした。

「すまない。忘れっぽい性格なんだ」

自己紹介が続く中、俺らはお互い進行を邪魔しない程度の声量で会話を続けた。

「仮にも星条生なんだから、たかだか四十人の名前くらい一瞬で覚えないと」

「……さすが星条の生徒ともなるとそんな暗記ができるのか？」

感心して目を剥いていると、すかさず彼がこう切り返した。

「いや僕には無理だけどね」

なんだそりや。

「でも君の名前は覚えたよ。補欠合格の橋京介くんだ」

「それ、他人に言われると複雑だな」

「いいじゃないか、インパクトがあつて。隣の彼女ほどじやないけど」

澄まし顔で、天野は横目を投げた。視線の先にはもちろん乾桜子

がいた。

「僕なら話しかけられないなあ」

それ、本人にも聞こえると思うんだが。

隣の様子を伺う。彼女は氣にも留めていない。どうやら徹底的に無視することにしたようだ。

「まあ何はともあれ、僕たちはつらい受験勉強を乗り越えて、こうして同じクラスになれたんだ」

構えない笑顔で、彼はすっとその手を差し出した。

「よろしく、橘くん」

「京介でいいよ」

躊躇わざ俺は彼の手を取つた。同性では初めての学友といふことになるだろう。

だがふと思ひ至つて、俺は彼の体をまじまじと見つめた。

「な、なんだい……京介」

「いや、その……つかぬこと訊くんだが……」

天野が怪訝そうに眉を顰める。

「お前はその、ちゃんとした男だよな?」

それを聞いた天野が途端に呆れたような声を上げる。

「当たり前じゃないか。何でそんなこと訊くの?」

即答した天野に、俺は安堵の溜息を漏らしていた。

「何。ちょっと例外に会つたのさ」

天野がぽかんと口を開けていた。感の鋭い彼でも、流石に男装した女生徒がいるとは思わなかつたのだろう。

「……ん?」

その時、誰かの視線を感じたような気がして、俺は隣のスケバン少女の方を見た。だが彼女は変わらず不機嫌そうな顔で教室の前方を睨んでいる。気のせいだつたか。

訝りでいるが、最後の一人が自己紹介を終えた。まだ遠慮がちではあるが、周囲の人間と会話を試みる生徒もちらほらと現れている。簡単なステップだが、俺たち赤の他人は、一応のクラスメイトとい

う関係に昇格したのだ。

兎にも角にも、新生活。

教室は高揚と活気に満ちていた。

(4)

早いもので入学式から一週間が経つた。

一週間前はただの見知らぬ他人であつたクラスも、それだけあれば十分に友と呼べるものに変わる。ただの机と椅子だつた物がいつしか自分の居場所に変わり、そこから交友関係もまた拡がつて行く。授業進度が中学のそれよりも遙かに早いことに辟易しつつも、一年B組の連中は少しずつ環境に馴染んでいった。

そんな中で、目立つて連帯感の強いグループが現れ始めた。彼らには共通点がある。寮生だ。

星条学園は名門私立。県外からの生徒も多い。そのため校舎に隣接した学生寮では多くの学生が寝食を共にし、授業外でも頻繁に顔を合わせている。必然的に寮生間の親密度も高まりやすいのだ。生徒全体に占める寮生の割合は二割ほどで、単純計算、四十人いる級友のうち八人が寮生ということになる。

「寮つてどんな所なんだ？」

試しに寮生である天野に訊ねてみると、彼は「賑々しい所」と即答した。一週間話してみたが、天野は爽やかな好青年で、空姫に及ばずとも劣らず凜々しさがある。空姫は女子なので、比べる対象として間違つているかもしれないけど。

「名物寮らしくてね。いろんな伝説があるらしいよ。僕もまだ幾つか聞いただけだけど。ただ、とにかく先輩が強引だ」

言いながら天野は苦笑した。元男子校における上下関係は共学以上に厳しいイメージがある。そういえば去年までは完全に男子校だったのだから、一年以上は全員男なわけだ。その中でペーペーの一年はさぞ肩身が狭かるう。

「へー、面白そうだな」

わざかばかりの皮肉を込めて呟く。

「今度遊びにいきよ」

だが天野は屈託のない笑いを浮かべた。きっと寮はいい場所なのだろうし、こいつもいい奴なんだろうな。自宅からバスで一時間かけて通う身としては羨ましい限りだ。

「ちなみに伝説といえば、この周辺には校外にもちょっと不思議な伝説がある」

会話に切れ目を持たせず、嬉々として天野がしゃべり始めた。もしかしてこいつは話好きなのかもしれない。

「不思議な伝説？」

「そう。実はこの星条学園の周辺にはとある神様がいて、僕たち生徒の行いを見張ってるっていうんだ」

「それのどこが不思議なんだ？」

神が見ているから悪さができない、なんて教えはどこにでもありそうなものだ。

「それがその神様は、鏡の中から人間たちを見守ってるんだよ」

「鏡の中？」

はて。どこかで聞いたような。

「だから星条生が何か悪さをする時は、鏡の前は避けろっていうのが習わしなんだ」

「悪さはするのかよ」

変わらない調子で述べた天野に俺は口角を引き攣らせた。

「見つからないようにそこそこの悪さをする。それが星条生、とりわけ寮生の信条さ」

その後、教科担任の教師が教室に入り、天野との会話は中断された。あのまま天野と話していくと何時間でも会話が続きそうだったので助かった。いい奴なんだが、ちょっとおしゃべりかもな。

そのまま机から教科書を取り出していた俺だったが、不思議と違和感を覚えて動きを止めた。

最近、何かを忘れているような気がする。

忘れているぐらいだから些事かもしれないが、こうして新生活を満喫する最中も、それは時折鎌首をもたげた。

隣を見る。スケバン少女、乾桜子がいる。彼女とはあれ以来一度も会話しないが、持ち前のつつけんどんとした態度でクラスに馴染む気配がない。

廊下では何度か空姫涼子と出くわした。その度に気さくな態度で話しかけてくる彼女は、相変わらず男子の制服を着込んでいる。にもかかわらず学校には溶け込んでいる様子で、生徒たちの懐の深さも名門と呼ばれる所以だろうか。

乾も空姫も、タイプは違うが変な奴だ。星条に変人が集まるのは重々承知だが、あの一人には少々面を食らつた。

だがそれ以上に変な奴がいなかつただろうか。

奇妙な感覚に苛まれていると、斜め前の女子生徒が使うスタンンド式の手鏡が目に入った。

机の上に乗った小さな鏡。身嗜みを整えるために鞄から出したのだろうが、教師が来てもそのままだ。おそらく仕舞い忘れているのだろう。

鏡の中から生徒たちを見守る神様、か……。天野の話を思い出した。そんなものがいたらおちおち学生生活も嘗めない。何だって自由が一番だ。伝説だか何だか知らないが、大方、生徒に規律を守らせたい昔の教師が面白半分で言い始めたのだろう。

机の上で教科書を広げながら、俺はふと、先程の鏡に目を止める。いた。

まさかと思い目を逸らすが、一度見する。
いる。

俺の他は誰も気付かない机の上の小さな鏡
その中で、ぶんむくれた栗毛の少女が肩を怒らせ、こちらをじとりと睨んでいた。

月島神社は、星条学園に向かつ通学路上に存在する。正確に言えば、街道をやや外れた山間に位置している。

月島街道。山中を突つ切り、街の南と西を結ぶ抜け道として使われるが、周囲には民家もなく、夜となれば少ない街灯の下、深い闇の帳が落ちる。そんな山道をやや逸れた場所に廃神社はひつそりと佇んでいた。

二ヶ月前、まだ雪が降り積もる頃、俺はここで星条学園への合格を祈願した。今ではすっかり雪は溶け、辺りには土筆や路の董が群生している。山は春を芽吹き、夏の準備を迎えていた。だがあの時と変わらず、境内に参拝者の姿はない。

「こうして見ると明らかに廃墟だな」

前回は雪のせいで把握しづらかつたが、剥き出しの敷地は完全に荒廃していた。石置は崩れ、雑草が繁茂している。社務所らしき建物も今は倒壊寸前で近寄るのも危険そうだ。少し歩を進めると、土まみれの絵馬が地面に散乱していた。風化のため文字は読み取れない。かつてはそれなりの参拝者がいたのだろうが、今では面影すら残っていない。ここは完全に廃神社だ。

しかしその割に拝殿は綺麗だった。賽銭箱の置かれた小さな建物。半紙のない障子扉から、空っぽの内装が顔を覗かせている。俺は二ヶ月前、この場所で不思議な体験をした。

「遅い！ 遅すぎる！」

そう。ちょうどこれと同じ、高慢ちきな音色だ。

拝殿の中から響いているのは、聞き覚えのある少女の声。

躊躇いつつも、賽銭箱の奥にある扉を開ける。途端に埃の臭いが充満した。何もない伽藍堂の部屋。その中心に、例の丸鏡が落ちている。

「すまない……」

頭を垂れながら、鏡を覗き込む。

すっかり機嫌を損ねた様子の少女が、鏡の中で醤油煎餅をかじつていた。

ウェーブがかつた栗毛髪に端麗な容姿。この前着ていたのとは違うワンピースは春物で、淡い空色が白い肌にはよく映えている。華

奢な腕が顎になり、肉付きの少ない身体を見て取れた。

「願いを叶えて貰った分際で礼も言いに来ないとは見下げ果てた奴じゃな！ そなたが来るまでにわらわが何枚の煎餅を完食したか教えてやるつか！」

ガミガミと怒鳴る彼女はちゃぶ台の前に座っていた。前と同じ球体の中の和室風の部屋だが、季節柄、炬燵は仕舞われたようだ。

「ごめん……完全に夢かと思って……ちなみに何枚？」

「八万四百六十二枚」

「…………その心は？」

「やおよろず（۸۰۴۶۲）だ！」

「お上手」

「からかっているのか！！」

彼女は両手を上げて憤慨した。自分で言つたくせに。

「しかしあの出来事が夢じやなかつたとすると、俺が星条学園に合格できたのは…………」

「すべてわらわの力じや」

胸を張つて即答した少女に、がっくりと頃垂れた。

合格発表当日の氣も狂わんばかりにはしゃいでいた自分の姿が蘇る。星条学園の玄関前。掲示板に貼り出された自分の受験番号を見て、俺は人目を忍ばず歓喜した。絶叫した。俺つええと本気で思つた。

だがそれは、見事な他力本願であつたといつ。神頼みしたのは確かだけどさ、それは心の持ち様だつたんだよ。まさか本当に願いが叶えられるとは思わないじゃないか。

「変だと思ったよ……俺の実力で受かるわけないもんなあ……」

涙で鏡が滲んでいた。目の前の少女から見て、あの日の俺はさぞ滑稽だつたのに違いない。

「では約束通り、わらわの願いを叶えてもらひやが」

喜色満面に少女は言い放つた。

しかし心当たりのない言葉に俺は眉を顰める。

「ん、何だっけそれ

「まさか忘れたのか!? そなたの願いを叶える代わりにわらわの願いを叶えると言つたであらう!」

彼女の叱責に、鏡越しに感じた温もりのよつた錯覚が、わずかだが手の平をくすぐる。

ガラス越しに合わせた手と手。彼女は言つた。契と。

「ああ、そう言えば!」

全てを思い出し、俺は拳をポンと手のひらに乗せる。

「忘れすぎだ!」

一文字一文字にイントネーションをつけながら、呆れ顔で少女が怒る。

「いやあ、昔から忘れっぽいんだよ。いいのこともなんだか夢現な感じで。でも今は思い出したからさー。」

「まかし笑いをしながらも、徐々に蘇るあの日の記憶。あの雪の降る日、確かに俺は、この少女に出会ったのだ。

「やうやう。名前は確か、ええと

言いかけて、俺は口ごもった。

「この子の名前、何だっけ?

「名前などない。わらわは神じや。人の子に『安』く呼ばれるような名は持たぬ」

少女はつづけんどんに言い放つた。どうやら忘れてたのではなく、初めから知らなかつただけらしい。

「でも名前がないってのは色々と不便だな。俺がつけてやるよ、」

そう提案すると、少女は恥ずかしそうに顔を紅潮させた。

「そ、そんなものはいらぬ!」

俺は構わず、彼女につけるべく名前を思案し始めた。折角の機会だ。とびっきりの名を授けてやろう。

「神様だから、なんだろう。イザナミがなんたらとか……イザナギは……男か。いいやめんどくさい。神子でいいや。よろしく神子」「適当だなおいつ!」

「いいじゃないか。神子。月島神社の神様だから、月島神子。いい

つきしまかみこ

名前だろ？」

適当に決めたにしては、要点を捉えたいい名前だと思つ。

「…………もう、勝手に呼ぶがよい」

少女改め月島神子は何やら落ち着かない様子で、もじもじと手を擦り合させていた。

「ところでさつきから気になっていたんだが、そこは一体、何処なんだ？」

鏡の中の不思議な一畳間。布団部屋よりも狭い空間は、一体どのような仕組みで成り立っているのだろう。

「ここは神聖なる神の世界、幽世じや

「……は？」

我ながら素つ頓狂な声が出た。

「わからぬか？ そなたのいる世界は、時間と有限の中に存在する。だがこの幽世は無限じや。永遠じや。人間の世界とは完全に隔絶された絶対的な神性空間がこの場所である」

脈絡のない説明に困惑していると、少女が中空に手を添えた。

「証明してやるつ。見ておれ」

するとその小さな手の平に、仄かな光芒が集まってきた。集束した光は徐々に輪郭を帯び、確かな質感を形成する。やがて物体を包んでいた光が消えると、彼女の手に赤々とした林檎が一つ乗つかつていた。

「どうじや、見ただろう」

高慢な口調で口端を引き上げ、少女はその林檎を齧つた。口に含んだそれを咀嚼するたび、シャリシャリといつ瑞々しい音が響いた。

「本物……なのか？」

何度も口を擦つて、歯型のついた林檎を確かめる。見間違いようはない。それは紛れもなく本物の林檎で、彼女はそれを手品のように中空から取り出した。夢のような力で、そこは夢のような場所だった。

驚きのあまり呆然としていると、突然シャッター音が聞こえた。見ると、少女がその手にポラロイドカメラを抱えている。

「ほれ、そなたの間抜け面を記録することもできる」

排出口から出てきた写真を、彼女は鏡越しに見せてきた。写真には俺の顔が写っている。不意を衝かれたためか悔しいかな本当に間抜け面だった。背景にはこちら側からは見えない部屋の様子も写っている。そこにも扉はなく、後ろには壁だけがある。そして壁際に一台の古い鏡台が置いてあつた。俺の顔はその鏡に映し出されている。どうやら彼女の方も、鏡からこじらの世界を覗いているようだ。

「このようなこともできる」

神子はカメラをどこかに消し、再び中空に向かつて手の平を添えた。

また同じように光が集まる。創り出された輪郭は一枚の薄っぺらい紙となり、少女の人差し指と親指に挟まれた。途端に輝きが霧散し、一枚の用紙が姿を現す。

「ほうほう……」

少女はまじまじとその用紙を見つめ、嘲笑めいた顔をこじらに向けた。

「これではとても星条学園には受けからなかつたじゃろうなあ」「はい！？」

驚嘆した俺に、彼女は用紙の表を見せた。文字情報が羅列されたそれに、俺は見覚えがある。

「それ、俺が直前に受けた模試の結果じゃないか！？」

「なぜそんなものがそこに。机の中に仕舞つてあるはずだ。」

「これを見ると、合格の最低ラインにあと一百人は抜かねばならんのつ。たつたあれだけの期間で、奇跡でも起きない限り合格は無理じゃろ？！」

彼女の言わんとしていることはありありと伝わってきた。

「あくでも神子の力……ってことだな」

俺は彼女の力によつて俺は合格した。それは疑いようのない事実。

彼女は自由自在に物を取り出すことができるし、個人の情報まで俯瞰できる超越した存在だ。

幽世。絶対的な神性空間。

彼女の言ったことの意味が、今はっきりと理解できた。

彼女は、神なのだ。

「わらわはこの場所から常に人間世界を見守つてある。そして時折、誰かの願いを叶えておるのだ」

神子は微笑した。神性を帯びた妖美な仕草は美しく、同時にどこか、非人間的だった。

「とにかく、契約は履行してもらう。この写真を見よ」

神子は懐から一枚の写真を取り出した。これもさつきのポラロイドで撮影したものだろうか。鏡に押し付ける形でこちらに写真を見せる。

「これは……？」

拝殿から外を見たアングルで、艶髪の少女が写っていた。背景の木々を見る限り晩冬か初春だろうか。以前ここに参拝した俺と同様に、彼女は両手を合わせ、熱心に何かを祈っている。

「……はて、どこかで見たような」

端正な顔立ちだがやや鋭い目つき。写真だけでも気の強さが滲み出ている。泰然と構えたその風貌は、人を寄せ付けないオーラがある。

「スケバン女じゃないか」

それは乾桜子その人だった。いつも隣の席に座っているスケバン少女。私服姿なので一瞬わからなかつたが、間違いない。

「そのスケバンなんぢゃらといふのは何だ？」

「一昔前の非行少女のファッショニサ。いや、一昔前かな……」

しかしこの場所に来たということは、彼女もまた月島神社の参拝者ということになる。こんな辺鄙な廃神社に……奇遇を通り越して奇特だ。

「なるほど、いやつは非行少女なのか……しかしまあよい。そなた

が知り合いならば話が早い」

神子はどこからか扇子を取り出し、音を立てて広げた。上機嫌を示す天晴のポーズ。まったくコロコロと、表情のバリエーションが豊かだな。

「わらわの願いとは、この女に関することじや」

「乾に？ まさかこの不良女を更生しろってのはやめてくれよ。教師じゃあるまいし」

終始しかめつ面で教室にいる乾桜子の姿を思い出す。威圧だけで負けそうだ。

「更生など頼まぬ。人間が人間を変えようとしても、程度は高が知れてるからな。そなたにはこやつと」

告げられる命令に息を飲む。なるべく乾には近寄りたくないが、この際仕方がない。できるだけパッパと済ませて、元の平和な高校生活に戻ろう。

「子をなして貰う」

早急に世界が静止していた。

「たのむ……聞き間違えたからもう一度

傾いた体と思考を立て直し、再び神子に問う。

予想通り機嫌を損ねた彼女は、億劫そうにこちらを睨んだ。

「はあ？ ちゃんと言つたであらうが。そなた橋京介はこの乾桜子とやらと、子供を作るのだ」

頭の中が真っ白になる。

月島神子。

鏡の中に住む神様。

ただでさえとんでもない存在である彼女は

とんでもない依頼を俺に持ちかけてきたのだった。

(5)

次の日の昼休み、俺は本人に気付かれぬよう、隣の席に座る乾桜子の様子をこつそりと伺っていた。

彼女の今日の昼食は、アルミホイルに包まれたおにぎり一つ。彼女は普段の豪快な態度とは裏腹に、それだけをちまちまと咀嚼している。

星条学園には学食が存在し、昼食は弁当組と学食組の半々だ。俺のような自宅通いは大体が弁当で、成長期只中の身、昼休みまでに完食なんてこともしばしがだが、今日に限って鞄の中の弁当箱は手が付けられずに残っている。

食事など、喉に通るわけがなかつた。

「そ、そんなの無理に決まつてるだろつ！」

神子のとんでもない依頼に俺は動搖を隠せなかつた。

子供を作る？ あの乾桜子と？

いくらなんでも不可能だ。

「なぜだ。そなたら人間は老い先短い人生の中で、いざれなりとも子をなすのだろう？ それが数年、遅かれ早かれの違いではないか」鏡の中の少女は得心の行かない表情で、憮然と柳眉を顰めている。仏頂面が自然体と言わんばかりに、彼女は機嫌を損ねてばかりだ。
「その数年がデカイんだよ！ つてか本人の同意とか……色々あるだろう……」

言つていて自分でも赤面してしまう。無茶苦茶だ。

しかし俺の反論などどこ吹く風で、彼女は訴えを続ける。

「あやつがそう願つたのだ！ 何も問題はないであろつ」

乾桜子が、そんなことを？ とても信じられないが、「写真がある」ということは彼女がここで参拝したのは事実だろつ。だが、子供だなんて……。

「あやつはここで願いを告げた。だからわらわはそれを叶えねばならぬ」

何せわらわは神だからの……と、殊更に彼女は自分の神性を強調した。しかしこうも神神と連呼されると、創造主のありがたみも何もあつたもんじやない。

「だけど……」

「いいからあやつを孕ませよー。」

俺の煮え切らない態度に彼女は捲くし立てる。つたくなんて神様だ。

「守らなかつたら……どうなるんだよ?」

彼女の表情を伺いつつ訊ねてみる。

すると彼女は悪代官風にケケケと笑い、思わずぞくりとするような艶美な視線を投じた。

「貴様を星条学園に合格させたのはわらわじや。当然、退学をせることなどわけないのう……フフ」

「あ、阿漕すぎる……」

まさに手の平の上の猿。彼女ならそれくらいわけないだろう。先程の力を見せつけられた後では彼女が神だと信じざるを得ない。

それでもせつかく入学できた星条高校の籍を、たったの一週間で失うわけにはいかない。

「わかつたよ。やつてみるが、やつてみるだけだからな!」

と、承諾してはみたものの。

午前一杯、俺は乾に声をかけるどころか、目を合わすことすらできなかつた。この昼休みが絶好のチャンスだが、それでも刻一刻と時間は過ぎて行く。

「大体、なんて切り出せばいいんだよ。神子のこと言つても信じて貰えないだろうし……」

チラと横を見る。彼女は黙々と昼食を口に運んでいた。周りを見ると、他の女子生徒は一箇所に集まつて机を囲い、昼食がてら話題

に花を咲かせている。クラスの女子は八人。少數なぶん、それだけ結託も生まれやすい。にもかかわらず、乾だけは一人だった。

あの性格だから仕方ないのかもしれない。当の本人も気とした素振りはないし、別に彼女が疎外されているわけでもない。他の女子は何度か乾を誘つたが、その度彼女がすぐなく断つたのだ。彼女たちは今ではもう誘うこと止めている。

やがて昼食を食べ終えた彼女は、ふと自分の鞄から一枚の封筒を取り出した。その中に入っていた紙切れ 手紙だろうか。その書面を彼女は心なしか柔らかな表情で見つめていた。

不意に見せた、彼女の微笑。

窓から吹くそよ風が彼女の艶髪を揺らし、穏やかな空気が昼下がりの教室を包む。それはまるで遠地より届けられた、我が子の便りを読む慈母。普段の彼女からはとても想像もつかない、優しげな女性がそこについた。

盗み見という行為の意味も忘れて、俺は見惚れていた。当然その視線に気付いた彼女は、パッとその手紙を机の中に隠した。

「アンタ、何見てんの？」

心臓が跳ねた。

ドスの利いた声音と、見るものを射殺しそうな視線だ。いつものスケバン少女がそこにいた。

「いや、その……誰からの手紙かなって……」

「ハア？ アンタには関係ないでしょ？」

物凄い剣幕で彼女は席を立ち上がった。今にも鉄拳が飛んできそうな迫力だ。

「いや、確かに関係ないんだけど、関係しなきゃいけなくて、神様の命令で……」

いかん。あまりの恐怖に思考が混乱し始めた。その間にも彼女は距離を縮めて迫ってくる。……これは、百人を殺ってきた人間の目だ！

「アンタからかってるの？ 人のプライバシーを覗き込んで……覚

悟はできてるんでしょうね

拳を鳴らす音が教室中に響く。そもそも関節の音つてそんな大きさだっけ。

「いや、ちょっと待て。これには宗教的な事情が！」

突然の出来事にクラスメイトたちの視線も集まっている。だが乾がそれを気にする素振りはない。黒曜石の瞳に獲物を捉えて、剣のオーラを纏っている。

「意味わかんないんだけど。アンタやばい薬でもやつてんの？」

「いや嘘じゃない！ 僕はお前のためを思つてだな」

「何でそれが私のためになんのよ」

「だからなるんだってば！ つまりその……あれだ」

なんだか自分でもよくわからなくなってきた。なんで俺、自分の命を危険に晒してるのであつ。

「何よ」

全ての元凶、丹島神子の言葉を思い出す。

『そなた橋京介はこの乾桜子とやうど、子供を作るのだ』

ええい、もうどうとでもなれ。

迫り来る恐怖を見据え、俺はきつぱつと黙つてやつた。

「乾、俺と子供を作りう」

問答無用でぶん殴られた。

(6)

田を覚ますと、すぐ田の前に天井があつた。だがよく見るとそれは天井ではない。一段ベッドの上段だ。

ベッドから上体を起こすと、頭に激痛が走る。この痛みは乾に殴られた跡だ。彼女の形相を思い出すだけでも身震いがする。人が一撃で卒倒できるとは知らなかつたな……。

「ijiは……どこだ？」

手で頭を押さえながら、周囲を確かめる。初めは保健室かと思つたが趣が違う。ベッドを囲むカーテンも、消毒液の臭いもない。そこはよく普通の部屋だつた。勉強机に本棚。それと一段ベッドがあるばかり。俺はその下段に寝かせられていた。

「やつと田覚めたのかい、京介？」

「うわっ！」

突然、視界に逆さまの青年が飛び込んできた。吃驚して声を上げると、青年が一瞬つるさそうに耳を塞いだ。滑らかなショートヘア一が重力に引かれて広がつていて、よく見るとそれは男子ではなく、見知つた女子だつた。

「空姫！ つたく脅かすなよ……」

「いやー、脅かすつもりはなかつたんだけどね」

一段ベッドの上段から顔を出した形で、彼女が小さくベロを出す。そして身軽な動作で地面に着地した。

「空姫、一体ここは何処なんだ？」

彼女が制服を着用しているのを見るに、学校だらうか。

「ん、ここは嵐乃寮だよ？」

「嵐乃寮？」

知らない名前だ。

「星条学園の学生寮のことだ。ちなみにijiは僕の部屋」

なるほど、ijiが例の学生寮か。確かに無駄な物がないあたり、

学生のための生活空間らしい部屋である。空姫は寮生だったのか。

「仮にも乙女の部屋なんだから、あんまりジロジロ見ないでよ?」

「い」「ごめん!」「

冗談っぽく笑う空姫に、思わず赤面してしまった。言われてみればここは女子の部屋だ。彼女の格好が格好なだけに気付くのが遅れてしまった。

「まあ僕はいいけどね。でもここはルームメイトの部屋もあるから」

「ルームメイト?」

「うん。寮は基本的に一人部屋だからね。学友との共同生活も教育の一環みたい」

共同生活とはまた魅力的な響きだが、何かと大変なこともあります。自宅生の俺には関係ないけどさ。

「……ところで、どうして俺はこんなところにいるんだ? 学校はどうなったんだよ?」

そうだ。俺は昼休みに気絶したのだ。早く授業に戻らないと。

「学校ならとっくに終わつたよ。窓の外を見てこらん? もうこんなに暗いだろ?」

「……へ?」

慌てて窓を見ると、外は暗闇に覆われていた。辺りは完全に夜だつた。

「最初は保健室で寝てたんだけど、あんまりに起きないから保健医さんも困つてたんだよ。彼女も家に帰りたかっただろうしね。だから仕方なしに僕が京介をここに運んだんだ」

「空姫が、一人でか?」

仮にも女性である彼女がたつた一人で俺を運んだとは考えにくい。すると彼女は「まさか」と首を振つた。

「途中まで手伝つてくれた親切な生徒がいたんだよ。さすがにそこまで力持ちじゃない

「そうなのか……」

どこの誰だか知らないが親切な奴もいたもんだ。ただ、運ぶ場所は選んで欲しかった。まさか女子の部屋に抱き込まれるとは……。「ちなみに担任には僕が言つておいたから、授業は無断欠席になつてないからね。感謝してよ?」「

「お、おつ……サンキュー」

そんな言い方でもまったく恩着せがましくないのが空姫の特徴だ。「でも京介が桜子に殴られて倒れたって聞いた時は驚いたよ。保健室に行つてみれば京介は氣絶したまま目覚める気配がないし、拳句の果てには桜子の付き添いで僕まで指導室に呼び出されるし……」「ちょっと待て。空姫は乾を知つてゐるのか?」

その口ぶりでは、割と親しげのようだ感じたが。

「そりゃそうさ。だつて桜子は」

途中まで説明した空姫はドアノブの音に首を回した。つられて俺もドアの方に目を向ける。

扉を開けて入ってきた人物が驚きのあまり固まつていた。同じようく俺の体も硬直する。しばらくして、相手の方が先に口を開いた。「なんだアンタがここにいんのよッ! こいつの変態がッ!」

血相を変えて叫んだその人物は、スケバン少女、乾桜子だつた。

「へ、変態つてんだよ! 僕は正常だッ!」

「衆目で堂々と子作り宣言した男が変態以外の何者だつていつのよ!」

覚えのある言葉に頭を抱える。あー……そう言えればそんなこと言ったかも。我が高校生活において消し去りたい記憶の筆頭だ。まだ入学して一週間なんだけど……。

「え、京介そんなことしたの?」

若干引き攣つた顔で空姫が仰け反つた。

「誤解だ!」

「事実でしょーがッ!」

乾が額に青筋を立てていて。殴られた記憶が本能的に作用しているせいか、彼女がそこにいるだけで粟立つものがあつた。

「てか涼子、なんでここにいつがここにいんのよー?」「僕が運んだから」

涼子があっけらかんと答える。

「女子寮に男連れ込むとか何考えてんのよー!」

転瞬、俺の思考が停止した。

「いやー、だつて保健医さん困つてたみたいだから。寮の部屋に運んでいいかって聞いたらオッケーだつて言うし……」

「それはアンタが男だと思ったからに決まってるでしょ!? 女子だと知つたら許可しないわよ!」

「なるほど!」

「なるほどじやないッ!」

「ちょ、ちょっと待て」

衝撃のあまり傾きかけた思考を持ち直して、俺は一人のやり取りを遮つた。空姫はのほほんと、乾は鬼の形相でこちらを見る。

「ここは……女子寮……なのか?」

確かめたくない事実を、意を決して問い合わせす。喉がカラカラに乾き、嫌な汗が背筋を這つた。

「そうだよー」

空姫の言葉に俺は脱力した。女子寮に男子生徒 [冗談では済まされない状況だ。こんな格好でも空姫が女であるからにはここは女子の部屋で、女子の部屋があるからにはここは女子寮なのだ。初めの段階からその考えがすっぽりと抜け落ちていた。

間を置かずに乾桜子が告げる。

「あたり前でしょ? ここは私たちの部屋なんだから」「私たちの部屋?」

二人の女子生徒を見比べていると、空姫が説明を始めた。

「さつき言つたでしょ? ルームメイトがいるつて。桜子は僕のルームメイトなんだ」

ということは、ここは乾の部屋でもあるのか。俺はそんな場所に寝てたんだな。寝首をかかれる前に目覚めて心底よかつた……。

「ちなみに自宅生の京介のために説明すると、正確に言えばここは

星条学園嵐乃寮の女子棟なんだ」

「女子棟？ ジャあ、男子寮と繋がってるわけじゃないのか？」

星条学園の学生寮は校舎のすぐ隣にある。この部屋は別の棟にあるということだろうか。

「うん。女子棟は本棟とは隣接してないんだ。ここはちょっと奥まつた所にある離れみたいなものでね。大きさも本棟に比べればだいぶ小さいんだ」

「そう言えば、女子は今年が一期生だったな」

七十年男子校を貫いた星条学園は、今年から共学制になった。そのせいか女子生徒の数はまだ少ない。その中で寮生の数も限られるから、必然的に女子棟に入居した生徒も少ないはずだ。

「そうだよ。今年の女子棟に入ったのは、僕と桜子を含めてたつの七人。おかげで悠々と使えるけどね」

「七人！？ ジャあ寮内での仲もよさそうだな」

男子寮生を見ていると、入学一週間にも関わらず、相当気心が知れています。

しかし空姫は、苦笑にも似た表情を浮かべた。

「そうでもないよ。入学式の時も言った通り、ここは女子は変なのが多いからね」

「アンタがそれを言うのか……」

呆れ顔で乾がツッコミを入れる。他はわからないが、少なくともこの同居人の関係は良好そうだ。

「でも新しく拵えたにしてはやけに古めかしい作りなんだな」

二人部屋の内装は、校舎に負けずと劣らず傷んでいる。蒼古と言えば聞こえはいいが、住むには色々と苦労もありそうだ。

「本来、ここは財閥の御曹司とか、身分の高い学生が使っていた特別な寮らしいからね。今回はそれを最低限改装しただけで、本格的な改修は三学年揃ってからするんだってさ」

「同じ学生なのに、過去には優遇されてた奴らがいるのか」

まさかうちの学校にも色々とダークサイドが……。

「かなり昔の話さ。最後に使われたのが何十年も前だから使用しない部屋は今でも埃臭いけど、おかげで設備は本棟よりもいいんだ。まあどれも古いけどね」

「 無駄話はそろそろいいかしら」

乾のどす黒い睨みが向けられ、俺は思わず怖気立つた。必死に話を逸らしてたの、もしかしてバレてた？

「涼子のせいとはいえ、教室で私にあんなことを言つた上、部屋にまで潜入するなんて、死ぬ覚悟ができるつてことでいいわよね？」あまりの迫力に、あつという間に壁際まで後退する。

「し、死ぬ覚悟はできてない。頼むから話を聞いてくれ」「問答無用……」

それは教室でも目にした光景。

黒々としたオーラを背負い、乾桜子が拳を鳴らし始めた。これは百一人を殺ってきた人間の目だ！

覚悟を決めて瞼を強く閉じた俺は、不意にドアを叩くノックの音を聞いた。

「乾さん、空姫さん。点呼の時間です。一人ともいらっしゃいますか？」

扉の向こうから、聞き慣れない女子の声が聞こえた。

名前を呼ばれた二人が青ざめる。咄嗟に空姫が俺の体に布団を被せた。

予期せずして視界が真っ暗になる。

「わつ、何す 」

「いいから！ 絶対黙つてるんだよ？」

深刻な声音で囁きかけ、空姫が俺の頭を押さえつけた。結果的に、彼女は俺の体にのしかかる形になる。

布団越しではあるが、彼女の柔らかい部分が当たつていた。鼓動が高鳴るのを感じる。正直今でもまだ少し疑っていたが、空姫涼子は正真正銘の女だったようだ。

ギイと扉の開く音がする。彼女に密着し、緊張しているせいもあつてか、俺は身動きひとつ取れずに布団の中で沈黙していた。

「一人ともこりひっしゃるよりですね。あら、空姫さん。もつおやすみなの？」

「う、うん寮長っ！ 今日は色々あつて疲れちゃって……」

寮長、点呼。どうやらこれは寮生を管理するためのシステムらしい。夜になつても生徒が外を徘徊していたら問題だもんな。

「そうですか……。そういうえば今日、お一人は指導室に呼び出されたそうですね。女子棟の名誉にも関わりますから、是非とも謹んだ学生生活を」

バタンと扉が閉まり、寮長と呼ばれた人物は廊下を去つていった。氣のせいか、今の台詞に相当の劍呑が含まれているように聞こえた。一人分の安堵の溜息が漏れた。空姫の体が離れたので、俺はようやく暑苦しい布団から顔を出すことができた。

「今のは……？」

「女子棟の寮長だよ。普段は温厚なんだけど、怒るとすつごい怖いんだ」

真面目な顔で空姫が言った。

「乾よりもか？」

「うつさいーー！」

彼女は相変わらずの剣幕で睥睨したが、すぐ口元で皿の口を押さえた。まだ寮長が近くにいる可能性がある。

「一応聞いたくけど、さっきの寮長に俺の存在を知られるどじうなるんだ？」

「十中八九 退学」

彼女の態度を見るに、冗談ではないらしい。

「退学！？ いくらなんでもそれは……」

厳しそぎやしないか。

「何言つてんの。うち名門校なのよ？ 男女の不祥事なんて許されるわけないじゃない」

「不祥事……か」

常識的な見方をすれば、確かに学校の敷地内で男女が一夜を共にするのは大問題だ。たとえやましいことがなくとも、騒ぎになるのは必然だろう。女子寮発足と同時に最悪の不祥事。学園の名誉を考えても、そんな問題児を放つておくはずもない……。ならば退学も妥当かもしれない。素行の悪さや喧嘩沙汰とはまた一線を画する由々しき出来事だ。

「じゃあ一刻も早く俺はここを出た方がいいじゃないか！」
すぐさま立ち上がりた俺は、窓から外に出ようと考へた。「ここは二階。飛んで着地できない高さでもない。

「無駄よ」

しかし不機嫌極まりない態度で、乾がそれを制した。
「なんでだよ？」

後ろから止められ、俺は躊躇を踏んでしまった。

「うちの寮は午後八時を過ぎるとセキュリティが閉じられるんだ。離れとはいえ、大勢の男子が暮らす敷地内だからね。学園側も女子寮のノウハウがないぶん、警備には例年以上に力を入れてるんだ。午後八時を過ぎると外からは安全。けど裏を返せば、それ以降は中からも絶対に出られないんだ。その窓から飛び降りたが最後、きっと何人もの守衛さんがやつてくるよ。玄関は寮母さんが見張つているし、夜中は鍵がかかってる」

「つまり……どういうことだ？」

額を伝う冷や汗を感じながら、敢えて俺は聞いてみた。答えはわかつてるんだけどさ……。

「閉じ込められのよ、アンタは。よりによつて十五歳の女子しかないこの女子寮にね」

乾が改めて告げた絶望的な状況に、体中の力が抜けていく。どうしてこうなった。あいつか。全部神子のせいなのか。

「まあ、なっちゃつたものはしようがないよ」

気分を変えて、おちゃらけた態度で空姫が言い投げる。

「だから半分は涼子のせいだっての！」

乾はその視線の刺を、俺とルームメイトの交互に向けた。痛い。

視線だけで刺痛が。

「しようがないって言つたって……じゃあ俺はビリすれば……」

その時、空姫涼子が悪戯にやりと笑つた。

嫌な予感がした。乾桜子も同じ感情の最中にいるのがひしひしと伝わってくる。

「泊まつていけばいいじゃない。この部屋にさ

彼女の言葉に俺と乾が絶句したのは、もはや言つまでもなかつた。

「そんなこと許されるわけないでしょ？」「

今まで最も強い睥睨がこの身に突き刺さる。乾桜子の怒りは極地だった。溢れんばかりの殺気が部屋中に充満している。

「そ、そうだ空姫。男が女子寮に泊まるなんて許されるわけが……なるべく事は穩便に済ませたい……できれば乾が実力行使に出る前に。その握った拳はどこに振り下ろすんですか……？」

「だから許される許されないの問題じゃなくて、そうするしかないってこと。京介は寮に閉じ込められたんだよ？ っていうか廊下に出ることさえも危険だ。誰かに見つかったりしたらその時点で終わるからね」

「それは…… ただけど。だからと黙つてこんな奴を……」

乾は答えに窮しつつも、不服そうに両拳を鳴らし始めた。教室での記憶が蘇り、悪寒が体中を走り抜ける。

しかし悪寒と同時に別の物も走り抜けた。

「……あの、お二人とも。」相談中悪いんだけど……

「アンタは黙つてなさいよ」

「どうしたの京介？ 具合悪そつだよ

この部屋の住民は態度があべこべだ。まさに飴と鞭。そして今は飴の方に縋りたい。主に体の一部が……。

「トイレはどうでしようか……」

沈黙が落ちてくる。二人の絶句した少女がこつちを見つめていた。 しうがないだろ？ 数時間も気絶しつぱなしだったんだから！ 「アンタ何バカなこと言つてんの？ 一日ぐらい我慢しないさいよ ツ！」

「無理を言つた無理を！」

「この女は…… そのうち酸素が勿体ないから一晩息を止めると出しそうで怖い。」

「でも困ったな。廊下に出ないとトイレはないし、もし誰かと鉢合わせしたら……」

空姫が困惑し沈黙する。たのむから何か言ってくれ……膀胱が、ちょっと……ヤバい。

「仕方ない。僕が先回りして様子を見てくるから、桜子は廊下を見張つてよ

「なんで私が！」

「いいじゃない。それしか方法がないんだから。文句ばつか言い代案を出さないのは桜子の悪い癖だよ？」

「なつ……！」

空姫の諫言に乾は不服そうだったが、結局何も言い返せずに押し黙つた。

「悪い、二人ともお願ひします」

俺は限界に近い下腹部を押さえながら、嘆願の意を込めて頭を下げた。半分はまともに立つていられなかつたからなんだけど。すると渋々と承諾した乾が、何も言わず扉を開けた。顔だけを出して廊下を偵察している。

「誰もいないみたいよ」

乾がつっけんどんに振り返つた。俺を見る目がいちいち怖いが、協力は素直にありがたい。

「じゃあトイレの様子を確認してくるから、僕が呑団したら京介も来て」

空姫は忍び足で颯爽と廊下を駆けて行つた。

扉越しに外の様子を伺うと、目の前にまず窓があつた。建物全体は思ったより大きくない。板張りの廊下が左右に延び、同じような扉が手前はずらりと並んでいる。壁の端から端までは三十メートルもないだろう。この部屋はちょうど真ん中辺り。幸運にもトイレはすぐ近くにあつた。

他とは色の違う扉を開け、空姫はその中に入つていつた。程なくして彼女が顔を出し、こちら向けて手招きをしている。

「他の部屋をジロジロ見てたらぶつ殺すから」

背中に突き刺さる声を受け、背後に漂う負のオーラから逃げるよう、俺は空姫の元まで抜き足で歩いた。なんというかそれは実に間抜けな光景で、まるで間男になつた気分だった。

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫、誰もいないよ。僕は扉の前で見張つてゐるから、何かあつたら言つてね」

空姫に背中を押され、俺はトイレの中に踏み込んだ。よくあるタイル張りの床。置いてあつたスリッパを履き、改めて辺りを確認する。

「考えてみれば、女子トイレなんだよな……」

妙な緊張に唾を飲み込む。断じて興奮じゃない。飲み込んだのは生睡じやない。

「あれ……？」

しかし俺は意外な光景を目にした。

トイレは中心に壁を隔て、左右に分かれていた。左側には個室が並んでゐる。しかし右側には男子用の小便器が並んでいた。何のことはない。内装は男子トイレそのままだつた。

「そう言えば元々男子寮だつたのか」

部屋での話を思い出した。改修はしたが本格的な改築はまだつて空姫も言つてたな。

「いや、納得してる場合じゃないし！」

手間を考慮して、右側の小便器を使用する。危なかつた。越えてはいけない一線を越えてしまつところだつた。

目的を終え、すぐ側にあつた洗面台で手を洗う。男子側でも水は出でいるらしい。

「やつと人心地ついたな……」

ほつとして顔を上げた俺は、目の前の鏡に映つた人物を見て仰天した。

「うわっ、何してるんだお前！？」

「そなたの様子が気になつての……ふああ」

目と鼻の先に、自分のではない顔があった。神子だ。洗面台の四角い鏡に月島神子が映っている。畳の上のちやぶ台に突っ伏し、栗毛の少女が眠たそうに欠伸していた。

「どうしたの京介。大きな声出さないでよ」

扉越しに空姫の注意が飛ぶ。迂闊に大声を出しました。

「ああ、大丈夫だ。すまない」

空姫には何とか誤魔化して、再び田下の問題点に視線を戻した。試しに目を擦つてみたが、幻覚ではない。正真正銘の月島神子だ。

「どうして月島神社でもないのにお前がここにいるんだよ？」

空姫に怪しまれないよう小声で話しかけると、神子は眠たげな目を擦り、虚ろな瞳をこちらに向けた。

「……前にそなたとは契をかわしておるじやろ？ わらわは鏡越しに触れた者なら、どこにいようと交信できる。鏡のある場所に限るがな」

契 以前、彼女に言われて鏡に触れたことがある。あれがそうだったのか。

「その気になれば世界中の鏡からそなたを見ることがあるぞ。なぜならわらわは神……ぐう」

少女の上体がちゃぶ台の上にがくっと倒れ込んだ。

「おいおい寝るな寝るな」

冷静に突つ込みを入れると、彼女はその小さな体をむくりと起こした。

「ああ、すまんな……ふああ」

また欠伸。こいつの欠伸を聞くとこっちまで眠くなつてきた。

「なんでそんなに眠そなんだよ？」

「何を言つておる。普通ならとつぐに床に就く時刻だらうが……」

「とつぐにて……まだ八時過ぎだぞ」

どこのお子様だ。といつかそつちの世界に時刻はあるのか？ 前、

永遠がどうとか言つてただる。

「それはともかく、乾桜子との子供は出来たのか？ 男か？ おなごか？」

「はええよ！ そんなに早くできるかつ！」

思わず叫んでしまい、咄嗟に口を押さええる。こんな状況空姫に見られたらどう説明すればいいんだ。

「なんじや……鈍行じや のう」

じれったそうに神子が口を尖らせる。

「まだ少し話しただけだよ。それだけで殺されかけたけど……いうか一晩一緒に過ごすことになりそuddだから、本当に殺されるかも

……」「

女子高生とは思えないあの剣幕、気迫。思ひ浮かべただけでもゾッとした。

「一晩一緒に過ごすとは、どうこいつことじや？」

両眉を上げた彼女に、俺は事情を手短に説明した。それを聞き終えた彼女は途端に顔をぱつと明るくして、なぜだか上機嫌な含み笑いを浮かべた。

「よいではないか！ 今晚押し倒せ！」

「お前の思考はエロ親父か」

「しかし絶好の機会ではないか。これを期に乾桜子との親睦を深めよ

神子にしては的を射た意見だった。ただ、それを実行できるかどうかの自信はない。

「いや、俺は寝首をかかれることで精一杯だとと思うんだが」

「問答無用じや。今夜中に乾桜子と接近するのだ。そして明日わらわに報告するのだ。もしそれで何の進展もなければ わかつておるだらうな」

彼女が不敵に、そして妖艶に咲笑する。人外によるほとんび脅しに近い笑みに体中の肌が粟立つ。

「ど、どうなるんだよ……？」

百代末まで続く呪いか。はたまた地獄に落とすのか。想像するだ

けでも恐ろしい。

「それはのう」

妖しげな仕草に息を飲む。廃神社に祀られた神 その得体の知れない存在に、畏怖の感情が湧き上がる。たまらずに身構えると、彼女はゆっくりと上体を前のめりに倒した。

「…………ぐう」

寝てる。たつぱりと涎を垂らしながら。幼稚園児もビックリの寝顔だ！

「つたく風邪ひくなよ……神様は風邪ひかないのか」

前言撤回。こいつより乾桜子の方が百倍怖い。「神 スケバン」という方程式がここに爆誕した。

「長いよー京介、そんなに我慢してたの？」

空姫の声で我に返る。自分の置かれた状況を忘れていた。早く部屋に戻らなければ。

「悪い悪い！ さつさと戻るわぜ」

扉を開けて、見張りについていた空姫と会流する。神子との会話に時間をかけすぎたのか、彼女は不審そうにこちら眇め、

「京介、誰かと話してなかつた？」

「だ、誰と話すんだよ。最初に誰もいなって言つたのは空姫じゃないか」

「確かに……そうだけど」

渋々納得した空姫は、彼女の部屋に向けて踵を返した。用もないのにこの場にとどまるのは危険だ。

周囲に気を配りつつも、そのまま部屋に向けて歩いて行く。

それとなしに、彼女の体躯に目が行った。

廊下を歩く空姫の後ろ姿は、格好こそ男物だが、よく見ると体のラインも凹凸も、明らかに女性のそれだった。

寮長から俺を隠すため、布団越しに彼女と密着したこと思い出す。決して遠慮がちじやない、女性として立派な体つき。男は持ち得ない独特の柔らかさ。顔だってこんなに美人なのに、どうして彼

女は男の格好をしているのだろうか。

長い高校生活だ。いつしか聞けることができる日が来るかもしない。しかしそれよりも、今は自分の身が大切だ。

見つかれば退学。部屋には殺氣を背負ったスケバン少女……。

考えただけでも嘆息してしまう。

俺、生きて家に帰れるのかな……？

部屋に戻るとそこには、制服から私服に着替えた乾桜子だつた。

「桜子、この短時間で着替えちゃったの！？」

その姿を見て、空姫が驚きの声を上げる。

途中、神子と話したとはいえ、俺が部屋を出ていたのは正味一分ほど。その時間で彼女は脱ぐのが面倒くさそうな制服を脱ぎ、Tシャツにホットパンツといつラフな服装に着替えていた。それどころか制服が皺にならないようつきつちりハンガーにまで掛けた。なんという早業だろう。

「あ、当たり前でしょ。」いつが部屋にいたら他に着替える暇ないわよ」

私服姿の彼女は新鮮だった。面積の多いスケバンを着ていない分、艶美な体のラインがはっきりと見て取れる。すらりと伸びた足はつま先から太腿にかけてなだらかな脚線美を描き、その上で柔らかそうな丸みを抱いている。普段は制服に隠されていた豊満な胸部が白いシャツの下で自己主張していた。どうやら彼女はずいぶんと着痩せするタイプらしい。

「何見てんのよ」

「いや、別に……」

視線を察したのか、乾が恥ずかしそうに顔を逸らした。基本的に俺は部屋を出られないのだから、なるほどチャンスは今しかなかつたわけだ。スケバンといえど、乙女の恥じらいはあるらしい。

「でも空姫はどうするんだよ。俺もそつまた部屋を出るわけにもいかないし」

空姫は制服のままだ。俺は着替えがないので制服のままでよいとしても、自室にいる彼女が制服で過ごすのは変だ。いやまあ、着ている制服の種類は元々変なんだけど。

「ん？ 僕は別にいいよー」

すると何を思ったのか、空姫はおもむろに制服を脱ぎ始めた。ブレザーを軽く脱ぎ捨て、ネクタイの結びを解く。しまいにはYシャツのボタンを外し始めた。

「ななな、何やつてんだ空姫ッ！」

「よりによつてこんな奴の前で、アンタ馬鹿じゃないのっ！」

無節操な女子生徒を一人して諫める。しかし当の本人は全く気にする素振りを見せず、Yシャツのボタンを全部外してしまった。

「いいよ別に。男に見られても全然気にならないから」

衣擦れの音と共に、空姫が爽やかに笑つた。

はだけたシヤツの隙間から、ふくよかな胸元が覗いている。水色の下着は彼女の晴れやかな性格に融和しているが、その逆に扇情的な膨らみが艶美さを主張している。乾ほど豊満な体つきではないが、男子の格好の下に女性の素肌があるというギャップにはそれ以上の破壊力があつた。

「アンタが気にしなくとも」

思わず見とれてしまった俺は、死角から飛んできた足蹴りへの反応が遅れてしまった。

「この変態野郎が鼻の下伸ばして見てんのよッ！」

「ぐべッ！」

凄まじい衝撃と共に、後頭部へ乾のハイキックが炸裂した。激痛と同時に床が目の前に現れる。ああ、単に俺が床に突つ伏しただけか。

「あらら、痛そう」

「当然の報いだわ」

意識こそあつたが、乾の足の裏が俺の後頭部を押さえつけているため、起き上がるに起き上がれない。衣擦れの音は休まることなく響いている。もし今起き上がれば、たぶん俺の後頭部は頭蓋ごと叩き割られるだろうな……。

「もういいよー」

かくれんぼみたく空姫が告げると、ようやく体が解放された。顔を上げると、空姫はすっかり着替え終わっていた。

大きめのTシャツにハーフパンツという、乾よりも動きやすそうな格好。彼女らしい普段着だった。体の凹凸がわかりやすいからか、あの制服よりは幾分か女性らしく見える。

「ところで涼子、本気でこいつを泊める気？」

乾が念を押して訊ねる。俺に向けて厭忌を飛ばすのも忘れない。「僕がここまでやつて最後は『冗談でしたーなんてこと、今までにあつた？』

喜色満面に笑ってみせた空姫に対し、やがて乾は諦めたように深い嘆声を漏らした。

「……で、こいつ何処で寝かすのよ。床にでも転がしとく？」

まるで物のような扱いに辟易しつつも、俺は部屋の中を再確認した。家具は一段ベッドと勉強机。あとは収納スペースぐらいだ。あくまで学生寮だからか無駄な物は殆どない。当然予備の布団などなきそうだった。

「いくらなんでも床はあんまりじゃない？」

空姫が同情を見せる。彼女の優しさには感動を禁じえない。

「そんなことないわ。ゴキブリには床でも贅沢よ」

それを乾があつたり打ち消した。彼女の冷徹さには絶望を隠し切れない。

「……いや俺はいいよ。床でも何でも寝させて貰えれば」

厄介になる身だ。贅沢は言つていられない。

「でも……」

心苦しそうに空姫が悩んでいる。それからしばし思案していた彼女は、やがて咄嗟の思いつきを妙案と言わんばかりに打ち出した。

「京介は僕のベッドを使つていいよ」

その発言に俺は戸惑いを隠せなかつた。仮にも女子である彼女の寝床を借りるなんてできるわけがない。

「流石にそれは無理だ。それに空姫はどうするんだよ

「そうよー。代わりにアンタが床で寝るっていうの？ お人好しにも程がある」

「ううん。違う違う

必死に抗議する乾を、空姫は首を横に振つて制止した。

「何がどう違うのよ？」

乾が怪訝に眉を顰めた。

「考えてみてよ。ベッドは一段。下にある僕のベッドを使って京介が寝る。でも上にある桜子のベッドは余るでしょ？」

言わんとしてることが掴めず、乾も俺も首を傾げる。するとその時、空姫が彼女の両手を取つて満面の笑みを向けた。

「 桜子、今夜は一緒に……寝よ？」

まるでおねだりする子供のように、空姫が可愛らしく小首を傾げた。よく見ると彼女の顔が紅潮している。まさか。

唚然とする俺を尻目に、乾桜子は呆れたように溜息を吐いて

「ストップ。こいつ本気で誤解してるから」と言い放つた。

「び、びっくりした……」

勘違いだと気付き、ほつと胸をなで下ろす。思わず女子寮での禁断のあれそれを妄想してしまった。

「変態だね」「変態だわ」

じつとりした田で一人の女子の視線が俺を捉えていた。

「違げえよッ！」

起きいていてもボロを出すだけ、という理由から、俺たちは九時過ぎには電気を消して、それぞれ床に就いていた。消灯時間は十一時らしいのでまだかなり早いが、今日は色々遭つて疲れているのでちようどいい。家には携帯で連絡を入れておいたが、多分帰つたらこっぴどく叱られるんだろうな……。

空姫の布団は花の香りがした。鼻孔をくすぐる馥郁たる香りに弥が上にも鼓動が早まる。同じ年の女子のベッドで寝る機会なんて恐

「涼子のベッドで変なコトしないでよね変態」

意図せず表情を緩ませていると、上から刺のある声が飛んできた。

「するかよッ！」

すかさず抗議の声を返す。一段ベッドの上では今、乾桜子と空姫涼子の二人が寝転がっている。天井の軋む音が妙に生々しく感じられた。

「どうだか……」

姿が見えなくとも、乾との関係が険悪なのは変わらなかつた。まさか本当に寝首をかかれないとどうな。

「別に何してもいいよー。その代わり僕はここで桜子と変なコトしよっ」

「ちょっと、変なこ触らないでよッー！」

一人の黄色い声が響く。うーむ。これは耳に毒だ。

「いい、変態。少しでもその布団を出たらその瞬間に縊り殺してやるから」

一転して確かな殺意を含んだ声が飛んでくる。ルームメイトとじやれ合いながらも釘を刺すことだけは忘れないのね……。

「き、肝に銘じておきます」

そう。これが俺の知る本来の乾桜子だ。教室で一人孤高に過ごすスケバン少女だ。刺々しいオーラを常に振り撒いて人を寄せ付けない。

でもどうしてだろう。ルームメイトの空姫と接する時の彼女は少し違つた。あのピリピリした雰囲気がないし、どことなく表情も言動も柔らかい気がする。口調だけは男勝りだが、自分のベッドに空姫が入つても特に嫌がる様子もない。

今日の昼、手紙のような物を読んでいた乾が見せた、穏やかな相好。

空姫に接する彼女は、時折あれと同じ表情を見せるのだ。

スケバン少女、乾桜子。

彼女の本当の顔は、どちらなのだろうか。。

あれこれと思考を巡らせながら、俺は神子との契約も忘れ、更けていく夜と共に深い眠りに落ちた。

大丈夫。

夢の中だろうか。それとも現実か。虚ろに漂う意識の中、誰かの優しい声が響いた。

耳を澄ますと、すぐそばで誰かのすすり泣く音が聞こえてくる。
「……い、私を一人にしないでっ……」

上手く聞き取れないが、その声はしきりに誰かの名を呼んでいる。
とてもか弱い、巣から落ちた雛鳥のような声。女の子の声だった。

でも俺の周りにいるのは不思議と強い女の子ばかり。こんなに薄弱そうに泣く女の子を、俺は知らない。これは知らない誰かの声だ。
知らない誰かの、泣き声だった。

朝、何者かによつて不意にカーテンが開かれても、顔を枕に押し付ければ残り五分は惰眠を貪つていられる。なおも起きる気配のない息子に母親が痺れを切らし、定型句とも呼べる小言を連ねたとしても、手で耳を塞げばそれで解決だ。そうやって俺は、毎朝の貴重な睡眠時間を延長している。

あとは自然に意識が覚醒するのを待つだけ。人間、毎日の継続が肝心だ。だがその日の俺に訪れたのは穏やかな覚醒ではなく、鳩尾をピンポイントで直撃する足蹴りだった。

「 ぐはっ」

悶絶と共に俺は目覚めた。あまりの痛さに息ができず、脂汗がどつと噴き出す。必死に腹を押さえながら視線を上げると、そこに乾桜子が立っていた。

「 つたぐ、何度言えば起きるのみや！」

乾が目を吊り上げて俺を罵倒した。その横で空姫涼子が心配そうに顔を覗かせている。

「 ……なんで、お前らがここに」

途中まで言いかけて、俺は昨日の出来事を思い出した。

そう。俺は昨日、女子寮にある彼女たちの部屋に泊まつたのだ。全ては不可抗力。半ば事故のような形であつたが、女子の部屋に泊まつたという事実に、今更ながらに羞恥心が沸き起ころ。

「 いつまで寝ぼけてんのよ！ 私らは食堂に行つてくるから、それまでに登校の準備しひきなさいよ」

彼女たちはもう制服に着替えていた。乾はいつものスケバンスタイルで、空姫に至つては男子の制服。並べてみると何とも錚々たる服装だ。二人が二人とも校則違反というのは色々と問題だらう。

「 もうそんな時間なのか。俺の分の朝飯は……」

「 あるわけないでしょ」

乾がすぐなく即答した。そりや、侵入者に与える飯なんかないだろうけどさ。

「ごめんね京介、うちは食品管理も厳しいから何も持つて来れないかも……」

申し訳なさそうに空姫が手の平を合わせる。彼女たちは部屋を出でていったが、すぐに乾だけが戻ってきて

「少しでも部屋の物に触つたらどうなるか、わかつてゐるでしょうね釘を刺すのだけは忘れなかつた。

「……言われなくてもじつとしてるよ」

パタンと扉が閉められる。騒がしかつた部屋が、にわかに静けさを帶びた。

乾は学校の準備をしろと言つていたが、実際問題、昨日から制服のままだし、用意する物も特にない。というか何かしようにもここではやりようがない。全くの手持ち無沙汰だ。

本来の住人に取り残された俺は、取りとめもなく部屋を見渡した。簡潔で質素な部屋。一段ベッドの逆サイドに一台の勉強机が並び、その隣にはクローゼットがある。古い物件なのに和式でないのは、早くから西洋の趣を取り入れた結果だろうか。いずれにせよ、女性らしさのあまりない部屋だつた。

何気なしに一人の机に目をやる。左側が空姫の机だつた。なぜわかるかというと、壁に写真が貼りつけてあつたからだ。

「中学時代の空姫かな」

それは卒業式の光景だつた。卒業式と書かれた看板の前で、空姫が屈託のない笑みを浮べている。

「しかし中学でも男子の制服だつたんだな……」

写真の中でも彼女は男装だつた。学ラン姿の空姫に少し呆れながらも、俺はふと、看板の後ろで恥ずかしそうに顔を出す少女の存在に気付いた。髪の長い女の子だつた。同じ中学の女子生徒だろう。左半身だけを覗かせた彼女は、たつた一枚の写真からでもその内気さが読み取れた。

「まさかに空姫に惚れた女の子じゃないだろうな……」

「ありえそうで怖い話だ。卒業式に好きな美少年　しかしその実態は女　　に声をかけて一緒に写真を取ってくれとせがむ。しかしいざシャッターを押す前になつて、少女の心に恥ずかしさが込み上げた。如実に浮かび上がつてくる光景に、苦い笑いが隠せない。

対して乾の机には、教科書やノートといった勉強用具以外何もない。本当に何もない。空姫のよつたな写真も、ちょっとした文庫本も、勉強に必要なもの以外は何一つとして存在しないのだ。

「意外と勉強熱心なのかな」

でもまあ、ヤンキーたちの集会の写真がなくて幸いだ。その上「第一代総長乾桜子」なんて旗でも写っていたら、もう彼女とは怖くて口も聞けないだろう。考えただけでも戦慄が走る。

月島神子の要求により、俺はあの乾桜子と子供を作らなければならぬ。まったくとんでもない契約をしてしまつた。無下に断れば退学だと呟つし、一体これからどうしたものか。

先の見えない身の上に苦惱していると、背後で扉の開く音がした。

「二人とも意外と早かつた、な……」

「一人が帰ってきたのだと思い、振り返った俺は、そのままの体勢で硬直した。

そこに見知らぬ少女が立つていたからだ。

眼鏡を掛け、制服姿をしたその女の子は、丁寧に結つた三つ編みを肩口に垂らしていた。レンズの奥では翡翠のような双眸が覗き、和風で楚々とした顔立ちは、深窓の令嬢を思わせた。背は低く小柄で、体つきは控えめだ。清楚な佇まいを身に纏い、少女は穏やかにこちらを向いている。

それはいつか体育館で田撲した、あの文学少女だった。

やばい。

他の生徒に見つかってしまった。俺は今、女子寮に潜入した男子生徒だ。退学の一文字が脳裏をかすめる。入学してたつた一週間で

。

「あ、あの、これには深いわけが」

「大丈夫ですよ」

焦つて弁解を試みた俺を、少女が遮った。どことなく聞き覚えのある透徹した声。彼女は涼しげな表情を湛え、にっこりと笑つてみせた。

「私、警察に突き出したりしませんから」

清楚で温厚そうな仕草。敵意のない少女の態度に、俺はほっと胸をなで下ろした。

「あなたが私の命令に背かない限りは、ですけど」

「……え」

少女は清楚な雰囲気を崩し、妖艶に冷笑した。

「大変ですね。男子が女子寮に潜入して、あろうことか一夜を共にしたんですから。よくて退学……悪くて不法侵入罪といったところでしょうか。ひょっとして強姦罪なんかも付いたりして」

「ちょ、ちょっと待つてくれ。なんで俺が昨日からここにいるって

知ってるんだ」

慌てて質問する俺に、彼女がニタリと笑つた。

「ダメですよ。墓穴を掘っちゃ。現行犯ではありますけど、いつからいたかなんて証拠も出されていないのに」

鎌をかけられた ッ！

動搖を隠せず、冷や汗がビリと噴き出る。田の前の少女は今、俺を手玉に取っている。

「まあ、証拠はなくても確証はあるんですけどね。昨夜からあなたがここにいたつてい」

「それも……鎌か？」

今度は慎重を期して訊ねる。しかし彼女は嘲笑混じりに首を振つた。

「いいえ。答えはお手洗いの洗面所です。殿方用は誰も使っていませんのに、使用した形跡があつた。加えて昨夜の点呼時、彼女

たちの態度も怪しかつたです。誰か居てはいない人間、しかも男性があの部屋に居たと考えるのが自然ですね」

的確な推理。全てを見透かした涼しげな態度で、少女は淑やかな笑みを浮かべた。

「昨夜の点呼つて……もしかして君は？」

「ええ。女子棟の寮長、更科御影むらわじなみかげと申します」

彼女は名乗り、小さく会釈した。

女子生徒ということは同じ一年だが、歳不相応に大人びた少女だ。

「ところで俺の聞き間違いじゃないとしたら、君は俺を見逃してくれると言つたね」

「ハイ。学校にも警察にも連絡はしませんよ」

「そしてこれは聞き間違いであつて欲しいんだけど、その後『私の命令に背かない限りは』って言つたような……」

「あら記憶力が達者ですね。さすがは星条学園の生徒です」

あくまで淑女然とした振る舞いは崩さず、更科御影を名乗る彼女はあからさまな皮肉を述べた。

「聞き違ひじゃないのか……。それで、命令つて……？」

恐る恐る聞き返す。神子でさえ「契約」だったのに、彼女の場合は「命令」だ。しかもその単語はしつくりと感じられる。

「乾桜子さんの素行と服装を改善して欲しいのです」

その命令に俺は拍子抜けした。てっきり無茶な要求をされるのかと思いつきや、彼女が口にしたのは至つて真面目な相談だった。

「どうしてまた、そんなことを？」

月島神子しかし、乾に関する相談事が多いな、俺は。

「彼女の素行と態度の悪さは既に学校中で話題になっています。男子生徒への暴力沙汰に加え、あの風紀を乱しかねない身なり。でも彼女は先生方の指導を聞けません。言つたでしよう？ 私はこここの寮長なんです。寮生の素行が悪いと私の内申にも響くんですよね。寮生である彼女たちを纏め上げるのが、寮長である私の仕事ですか

「う

乾の服装や行動に問題がないとは思わない。学校の教師や、寮長である彼女が問題視するのも無理はない。

「乾だけか？ 空姫だって校則には沿っていないと思つんだけど……」

「彼女の場合、風紀を犯す危険はありません。もちろんいざれはどうにかするつもりですが、危急の課題は乾桜子さんです」

彼女の口振りは、とても同級生に対するそれと思えないほど事務的で、他人行儀だった。

「だからようお願いします。橋京介さん」

「どうして俺の名前を！」

急に名前を呼ばれ、俺は目を丸くした。彼女に名乗った覚えはない。

「あら。私は寮長ですもの。寮生が起こした事件の被害者は、こちらとしても把握しておかないと」

昨日、乾と空姫は指導室に呼び出されたとか言っていた。それに今彼女が言った男子生徒への暴力沙汰って、もしかして俺のこと？ 「けど乾を更生するなんて、どうすればいいだよ」

「それは橋さんに任せしますよ。土下座して懇願するなり、組み伏せて無理やり従わせるなりはあなたの自由です。いつそ手籠めにしてしまうなんてのはどうですか？」『俺色の女に染めてやる』なんて男らしく言つて差し上げれば、案外あの手の女性は弱いものですよ？』

手籠めつて……。見た目と言葉との間にずいぶんどギャップのある子だな。

「冗談。あいつの恋人になるとしたら、もっとじりり、包容力のある奴じゃないと」

神子との契約を果たすためにそれでは困るのだが、実際問題として俺には荷が重すぎる。

「まあ。女子寮に潜入するぐらいの度量があれば十分ではなくて？」

「冗談めかして笑った彼女は、背後から女子用の制服を一着取り出した。

「なんだ、これ？」

「彼女が身に纏っているのと同じブレザーとスカート。新品だ。

「とりあえずこれを彼女に着させて下さい。いつまでもあの他校の、しかもあんな非常識に長いスカートではたまりませんから、こんなものまで用意してるとは。俺に従わせる気満々じゃないか。『そう言われても、あいつが従うとは思えないんだが……』

「ではこれを」

彼女が次に取り出したのは瓶入りの牛乳だった。てか制服といい、どうから取り出してるんだ？

「これを持ちしるど」

「事故に見せかけねばいいんですよ」

彼女は不敵に微笑した。躊躇いのない悪意が、淑女というヴォーグルを被っているかのようだ。

「もし……失敗したら？」

返ってきたのは無言の笑み。乾とは違う、静かな殺意を感じた。しかも彼女の場合は社会的な殺意だからなお恐ろしい。

「ああ……この寮には変人奇人しかいないのかよ……」

自らの不運な境遇を恨み、俺はがっくりと肩を落とした。

「あら失礼ですね。これでも私、校内では清楚可憐で通つてるんですよ」

そう嘯いた少女は、見目や佇まいは麗しく、その言動にも不思議な魅力を纏っている。

ただ他の星条女子生徒に負けずと劣らず、やっぱり珍妙な種族なのだった。

「どうしよう……」

女子寮の寮長、更科御影が部屋を去った後、右手に牛乳瓶、左手に女子の制服を持ちながら、俺は途方に暮れていた。

『事故に見せかければいいんですよ』

彼女の貴婦人然とした笑みが思い浮かぶ。その裏に隠された確かな悪意も……。

登校時刻までそう時間はない。乾の制服をこの牛乳で汚せば、やむを得ずこの正規のブレザーを着用することになるだろ？

しかしその後、この生命が無事である保障はない。

一者択一。乾に滅多打ちにされるか、寮長によって社会的に抹殺されるか。

「うん。どちらも嫌だ」

結局どちらか決められないでいると、今度こそ一人が扉を開けて戻ってきた。

「ただいまー京介。元気にしてた？」

ご機嫌な態度で空姫が部屋に入る。その後ろを、むすつとした顔の乾が続いた。

「どうしたんだ乾？ 世界が終わつたような顔して」

「別に……」

乾ががっかりしたように嘆息する。事情を図りかねていると、空姫が腹を抱えて答え始めた。

「それが桜子、味噌汁を制服にこぼしちゃつてさー」

「笑うなって言つてんでしょう。あんなに熱いとは思わなかつたんだつてば」

「そんなに熱くなかったと思つけどなー」

「私のだけ特別に熱かつたのよー」

乾が顔を真つ赤にしている。見ると彼女がブラウスががつりと

汚れていた。濡れた部分が見事な染みになつている。

「お前、猫舌なんだな」

「つるさい。いいわよもづ。今日は学校行かないから」

乾は拗ねたように、一段ベッドの梯子を登つて行つてしまつた。

「えー、そんなのダメだよー。別の服でいいじゃん」

「他は私服しか持つてないわよ！」

ベッドの上部から彼女の声が飛んでくる。不機嫌極まりない声音だ。

「正規の制服は持つてないのか？」

入学したからにはその学校の制服を買うのは当然だ。いくら何でも、セーラー服しかないというわけではないだろ。しかし乾はその質問に、剣のある声で答えた。

「買ってないわよ、そんな高価な物。いいじゃない別に、制服ならなんでも」

「買ってないって……」

確かに制服は高いけど、高価すぎて買えない物でもないだろ。

「だったら私服で行けば？」同じじじゃん。スケバンでも私服でもさ

「空姫。それはいくらなんでも自由人すぎる。

「私服こそ部屋着ぐらいいしか持つてないわよ。よそ行きの服はこのセーラーしかないの！ まさか部屋着で学校に行けっての？」

まずい。ますます臍を曲げ出した。このままだと本当に欠席しそうだ。寮長の命令は乾の素行並びに服装を正すこと。寮生の無断欠席なんて言語道断だらう。そのシワ寄せが俺に来ることは明白の理だ。

「あれ、京介。その牛乳どうしたの？」

「……え？」

視線を右手に移す。寮長に貰つた牛乳瓶が握られていた。

どうしよう。

思わずアクシデントにより乾に牛乳をぶっかけずに済みそつだが、逆にこいつの行き場所がない。素直に寮長に見つかつたつて言うか

? けど命令のことを一人に知られたら厄介なことになりそうだ。
ここは黙っているのが吉か。

「ひ、拾つたんだ」

なんというバレバレな嘘だ！ 補欠合格、しかも他力本願で合格した人間の言い訳に期待した俺が馬鹿だつた。

「拾つたって……」

空姫が怪しげな顔をする。

「いや、違う。拾つたんじやない。搾つたんだ」

乳牛から。そして乳牛はそこで拾つた。

「まさかアンタ！ 部屋の外に出たんじゃないでしょうね。誰かに見つかつたらどうすんのよ！」

「で、出るわけないじやないか！」

出ではいない。……見つかつたけど。

「じゃあそれは何なのよ！」

詰問する乾に、俺は仕方なく瓶の蓋を開け、牛乳を一気に飲み干した。美味しい。朝から飲まず食わずだからな。

「安心しろ。普通の牛乳だ」

「そんなこと訊いてんじやないわよ！」

「そしてこれは、この学校の制服だ。いいから何も言わずにこれを着ろ」

差し出した制服に、二人ともきょとんと佇んでいた。さつき俺も同じ顔をしたんだろうな。

冷たい空氣の中を一人の嘆息が重なる。やがて空姫が苦笑しながら

「……寮長でしょ」

と呟いた。

「なぜそれを！？」

俺は彼女のことば一言も話していない。予期せぬ展開に狼狽えていると、空姫が「バレバレだよ」と苦笑する。

「なんだ、結局バレてたんじやない……」

乾がぐつたりと脱力して、ベッドの柵に寄りかかった。

「……つてことは味噌汁から全部仕組まれてたのか……なんたる不覚。……引き換えに後で何要求されるんだろ」

乾は強く歯噛みをし、悔しさを滲ませた。どうこうことだ。乾をこんな状態にさせたのも寮長の仕業だとすると、わざわざ俺が危険を犯す必要はなかつたじやないか。

混乱する俺は、それでも思考を立て直し、一つの仮説を立てた。つまり彼女は、一重の策を練つたのだ。

乾が猫舌であることを知り、彼女の味噌汁に細工をする。運悪くそれが失敗しても、後には俺の牛乳が控えているわけだ。なんたる策士。亡き孔明もびつくりだ。しかし俺の牛乳つて、響きがやばいよな。

「京介、見逃す代わりに交換条件出されたんでしょう？」

空姫が失笑混じりに言つた。どうやらそこまでお見通しらしい。

「お前らすごい洞察力だな」

「京介が表情に出しすぎだよ」

感心していた俺に、空姫がやや呆れ気味に告げた。あれ？ ホントに？

「それで、その牛乳をどうするつもりだったのかしら？」

こめかみを引き攣らせながら、乾がこちらを見下ろしていた。今にも殴らんばかりの剣幕で。

「いや、実行するつもりはなかつたんだよ……」

苦し紛れに嘘をつく。本当は是が非でも実行するつもりだった。だって社会的に消されるのは嫌じやないか！

「女の子に白い液体をぶつかけるなんて、京介何考えてるの……？」「何だその意味深な言い方は！ 牛乳でいいだろ牛乳で！ しかも選んだのは寮長だ！」

「あ、今想像したでしょ？ 桜子の綺麗な髪に滴る白い液体を……空姫が悪戯に笑つた。完全に楽しんでやがる。

「……の、ド変態がッ！」

乾がベッドの柵に足を掛け、顔を真つ赤にして憤怒している。

「ちよ、ちよっと待て乾！ 全部空姫が言つてゐるじじゃないかっ！」

「問答無用 つー」

彼女の叫び声が響き、プロレスラー顔負けのミサイルキックが見事、俺の顔面に着地した。

「京介、始業まで十分しかないから急がないとー。」

振り起こされて目を覚ますと、すぐ目の前に空姫の顔があつた。緊張で思わず視線を横に逸らす。するとその隣に見慣れぬ姿の乾が立っていた。学校指定の制服に着替えたのだ。

「着替えたのか？」

スケバンスタイルで見慣れた乾桜子が、他の生徒と同じブレザーを着用し、ごく一般的な丈のスカートを穿いている。露出は普通のはずなのに、普段とのギャップがあるせいが、その脚線美が妙に艶かしい。

「寮長の思い通りなのは癪だけどね。致し方なし」

いつもと違う彼女の姿は新鮮で、俺はしばし見惚れてしまった。

「何ジロジロみてんのよ……」

仁王立ちで彼女が柳眉を顰めた。

「いや、普通にすげー美人だなと」

「……ハア！？」

正直な感想を述べると、乾は酷く機嫌を損ねたようで、その場でそっぽを向いてしまった。

「こりら京介。いくら桜子が美人でスタイルがよくつたって、そう簡単にはあげられないよ。口説くにはまず僕の許可を取つてから

「

「つるさいわねアンタらはー！ タリヤと行かないと遅刻するでしょ

！」

乾はなぜか肩を怒らせ、そのまま部屋を出でていってしまった。

「どうしたんだ、あいつ

「さあて、どうしたんでしょうねー」

何か含みを持たせた表情で、空姫もまた部屋を出た。

「ほり、早く出ないと遅刻するよー！」

そうやって彼女が急かすので、俺は結局このやり取りの意味がわからぬまま部屋を出た。

時間が遅いからか、寮内に他の生徒は残つていなかつた。後は空姫が手際よく玄関先の寮母さんの気を引き、俺と乾はその隙を寮を出たのだった。

だがその間、乾は俺と顔を合わさうとしなかつた。
慣れない制服姿が恥ずかしかつたんだろうか？

乾桜子がブレザーを着ている。

たつたそれだけのことで、朝の教室は騒然としていた。

傍から見ればごくごく普通の女子生徒。しかし普段は他校の制服を身に纏っている彼女のこと、クラスメイトたちは異常なものを見る目で乾を物見していた。

一緒に登校する姿を人に見られないよう彼女たちとは少し遅れた教室に入った俺は、そんな彼女を横目に見つつ、隣の席についた。

俺の目には、乾が心なしか萎縮しているように映った。普段はふんぞり返って着席している彼女が、きょろきょろと視線を泳がせている。いつもは敢えて視線を避けられるくらいなのに、こう注目を浴びては彼女も息が詰まるのかもしれない。

何か助け舟を出すべきだろうか。声をかけようかかけまいか逡巡したが、急に馴れ馴れしく話しかけても周りからは怪しまれるだろう。それに彼女自身がそれを拒む。

「乾さん、今日は普通の制服なんだね」

突然の声に、俺も乾本人も驚いた。クラスの女子の一人が、やや恐る恐るであるが、彼女に声をかけたのだ。

「え、ええ……」

喫驚した様子で乾が返答した。そのたどたどしい口調から、緊張の具合が窺い知れる。

「いつものセーラーも個性的だけど、乾はブレザーも似合つてるよ。乾さん美人だし、何よりスタイルもいいもんね。私なんかちんちくりんで、本当に高校生かつて思うくらいだもん

しょんぼりと肩を落としながら、少女は笑つてみせた。

「そ、そんなこと、ないし、私、別に」

口ボットみたいな調子で乾が顔を紅潮させる。隣にいても緊張が伝わってきた。

「ずるい、私も乾さんと話す！」

その様子を見て、近くにいた別の女子が彼女すぐ側に近寄ってきた。

「え、何、私と！？」

そうこつする内に、教室中の女子が集まってきた。たじたじになつた乾を質問攻めにしている。乾を入れて計八人しかいないが、それだけで教室の中心がにわかに華やいた。

「スケバンがインパクトあつたからねー。服を替えるだけでかなり印象変わったよ、乾さん」

天野が興味津々な顔で話しかけてきた。

「だからって、こんなに周りの反応が変わるものか？」

今までみんな乾を避けてたのに。

「みんな本当は彼女と友達になりたかったんだよ。乾さん美人だし、たぶん同性の目にはかつこよく映つたんじゃないかな？」

「つまり今回の制服はあくまできつかけだつたつてことか」

まだ表情は固いが、徐々に乾の表情も笑顔になりつつある。彼女自身も最初はクラスを避けていたのに、些細な出来事でずいぶんと変わるもんなんだな。

「第一印象つて案外話してみると違つたりするじゃない？ 僕たち出会つてまだ一週間だもの。最初に印象なんてすぐにどこかに行ってしまうものさ」

「スケバンも大した障害にはならないか」「人というのは簡単で、難しいものだな。

「ところで京介、今日はずいぶん顔色が悪いけど、大丈夫？」

「……へ？」

天野の問い掛けに俺は虚を衝かれた。

今朝は顔も洗えなかつたからくすんでいるんだろうか。思わず顔を擦つてみたが、言われてみるとなんだか寒気がする。

「ホントに大丈夫？ 保健室行つたら？」

天野の反応を見る辺り、本当に調子が悪いらしい。そこまでいわ

れるとなんだか自分でも体が怠い気がしてきた。

「ああ、そうするよ……」

机に手をつきながら、俺は徐に席を立つた。女子の群れを横切り教室の外へ向かう。

そんな俺の様子に気付いたのか、輪の中心にいた乾が心配そうに声をかけてきた。

「どうしたの、京介？」

その瞬間、周囲の空気が固まつた。思わず俺の動きも止まる。彼女自身もとんでもない失態を犯したような面持ちで硬直している。「え、呼び捨て？ 乾さんと橘さんってどういう関係なの！？」

「もしかして付き合ってる！？」

まるで吶喊のごとく黄色い声が教室を飛び交う。これまで事態を静観していた男子たちも、何やらざわつき始めた。

「いや、違う！ 今のは涼子の影響を受けただけで、違うったら！」言葉通り、思わず口をついて出ただけなのだろう。だが覆水盆に返らず。女子たちの興奮は收まらない。これまでよりも数倍激しい質問攻めに遭い、事の発端となつた乾は辟易としている。

「俺、保健室行くから……」

否定しようにも火を油を注ぐだけだと感じた俺は、そそくさと教室を後にした。

廊下に出る時、何人もの男子たちの視線が背中に突き刺さつた。
……お前ら密かに狙つてたのかよ。乾は近寄りがたい空気を纏つて
いるが、確かに相当な美人だ。

だが寮での更に凶暴な彼女の姿を思い出す。

知らぬが仮。

まさにそんな訓示を頭に浮かべながら、俺は一階にある保健室に向かつた。

「痛たた……」

廊下を歩くうちに体の急さは腹痛に変わった。たまらずに腹部をさする。ついさっきまでは平気だったのに、一体全体どうしたつていうんだ。

階段を降りて一階。校舎の端に位置する保健室は教室の喧騒からも離れ、静けさの中にひつそりと佇んでいる。まだ利用経験はないが「保健室」と書かれたプレート見るに、ここで間違いはないようだ。

「とりあえず、寝させてもらおう……」

ノックの後に扉を開くと、消毒液の匂いがやや鼻をついた。まっさらなカーテンが風に揺れ、窓の外の新緑が朝日の中で光っている。薬品棚にいくつかのパイプベッド。そこはどこの学校にある保健室の風景だった。

保険医がいるべきはずの椅子に、一人の女子生徒が座っていることを除いては……。

「あら橘くん。どこか具合が悪いのですか？」

そう涼やかに微笑んでみせた三つ編みの少女は、更科御影 嵐乃寮女子棟の寮長だった。

「なんで……君がここに……」

酷くなる腹痛に耐えながら、訝しげに顔を顰める。どうして彼女が保健室に。具合が悪そうにはとても見えないけど。

椅子に座りながら、彼女は仄かな微笑を浮かべた。

「もしあなたが見ず知らずの他人から貰った飲食物に手をつけるようなお人好しだったとしたら、そろそろこの場所に来るだろ? うと思いまして」

「他人から貰った、飲食物……？」

彼女の意味深な言い回しには引っかかるものがあった。朝飯抜きの俺が今日口にした飲食物は、彼女から貰った牛乳のみ。

「……一服、盛ったのか」

迂闊だった。徐々に体の力が抜けていく。確かにこれは食あたりでも病気でもなく、何か薬の影響による脱力感だ。堪え切れず、つ

いには床に膝をついてしまう。

「まさかこんなに上手く行くとは思いませんでしたけどね。おかげで教室に出向く手間が省けました」

「タリと不穏な笑みを見せた彼女が、懐から薬包紙を取り出した。飲み薬……解毒剤か。

「俺とさらに取引しようつていうのか

解毒剤と引換えに何かを要求しようつて算段か。彼女の考えそうなことだ。

しかし彼女はあっさりと首を振った。

「いえ。単にあなたの教室に行くのが面倒だつただけです。知り合いも少ないこの時期に他クラスの生徒がいたら目立ちますからね」

「たつそれだけのために毒を盛るか、普通……」

彼女は屈み込んで、薬包紙に包まれた粉薬を俺の口に流し込んだ。脱力した俺は為す術なくそれに従う。彼女の方が身の丈はずつと小さいのに、彼女が母親で、俺は薬を飲まされる子供のようだった。

「死ぬよつな毒ではありませんが、このまま気を失われては困りますからね。はい、飲んで下さい」
彼女は棚にあつたコップに蛇口から水を注ぎ、俺の口元に押しやつた。しかし悲しい哉。体に力の入らない俺はコップに唇を当てることすらできない。

「まあ、そんなに毒が効いているんですか。性格に似て体も馬鹿正直のようですね。仕方ありません」

すると何を思ったか、彼女はコップに入った水を自ら口に含み始めた。そんな仕草でさえ彼女は詐欺的に淑やかだ。やがてコップを床に置いた彼女は、その端正な相貌を俺の顔に近づけた。

「何だよ……んつ……！」

一瞬、何が起こつたのかわからなかつた。

唇に柔らかな感触。あろうとか彼女は俺と唇を合わせ、口移しで水を飲ませている。湿り気を帯びた唇が柔らかに押し付けられる。生ぬるい水が口の中に侵入し、そのたびに頭の中が朦朧とする。

掬うように伸びされた両手に顔を固定され、抵抗もできぬまま、俺は彼女の口の中の水を最後の一滴まで注入された。

彼女の顔が離れる。口についた水を拭う仕草が艶かしい。

彼女の口経由ということはそれ以外の物質も含まれていたわけだが、できるだけそれは考えないようにした。

しばらくして薬が効き始めたのか、段々と力が戻つていった。

「何するんだよ！！」

まだ顔に熱を帯びながらも改めて俺は抗議した。いきなりに、しかも了承もなしに唇を奪われて、俺もうお嫁に行けない……。

「何を狼狽えているのです？ 私はただ状況に見合った行動を取つただけですよ」

すかした態度で彼女は元の椅子に座つた。彼女にはまったく動搖が見られない。俺はようやく理解した。更科御影はただ単に、楽しんでいるだけだ。牛乳に毒を盛つたのも、乾が朝味噌汁をこぼすよう仕向けたのも全て彼女の道楽。展開を皆予想した上で、彼女はそれを楽しんでいる。とんだ食わせ者だよ……つたく。

「それでは本題に入りましょう。あなたをここに呼び出した理由は、これです」

呼び出したなんて穩便な言い方では済まされない状況だったが、彼女は気にも止めない様子でまた背後から何やら衣服を取り出した。見覚えのあるセーラー服だった。

「乾のセーラー服じゃないか！ どうやつてそんなものを」「丈の長いスカートでわかる。これは乾桜子のスケバン制服だ。

「今朝洗濯籠に入れられていたのを拝借しました」
拝借つて……盗んだんじゃないのか。

「本来なら制服はクリーニングに出すのが常識ですけど、彼女は寮に備え付けられた普通の洗濯機で洗うつもりだったようですね。今朝の染みだけ手洗いで落としてあります」

味噌汁で汚れていたブラウスが部分的に濡れている。俺が気を失

つている間に洗ったのだろう。

「これを橘さんに預けます」

「……は？」

突然制服を手渡され、わけがわからず立ち戻く。

「再び彼女にこれを着させることがあつてはいけません。捨てるなり焼くなり、家でこそ匂いを嗅ぐなり、あなたの自由にして下さい」

「俺は変質者かッ！」

「あら、嗅がないんですか？ 乾さんの色々な部分の匂いが染み付いているんですよ？」

「染み付いてたつて嗅ぐかッ！」

赤面しながら訴える。そんな言われ方をされたら、この制服を持つているだけでも犯罪者扱いじゃないか。

「大体、なんで君が処理しないんだよ。乾にこれを着させたくないのなら、君が隠せばいいじゃないか！」

「それでは私が窃盗犯になつてしまします」

「俺ならいいのかつ！」

「はい」

平然とした即答。自分では手を汚さない悪の親玉の発想だ。

「……嫌だと言つたら？」

恐る恐ると訊ねると、彼女は突然どこからかポラロイドカメラを取り出し、シャッターを切つた。

「何するんだ！」

「いえ。女子高生の制服を手に盛つてゐる男子の姿があつたので写真に収めようかと」

カメラから出た写真に、セーラー制服を手にした俺の姿が浮かび上がつた。

「この方は、持ち主の残り香を楽しむのでしょうか。それとも女装癖があるのかしら」

「誤解をまねくよつた言い方をするな！」

三つ編みの少女は不敵に笑んだ。明らかに脅し。彼女の主張次第で、俺はいくらでも変質者にされてしまう。

「ちなみに空姫さんのベッドで幸せそうに眠るあなたの写真もありますよ」

「う」口と微笑みながら、彼女は別の写真を取り出した。それは昨夜の俺の寝顔だった。いつの間にこんなものを！

「……屈するしかないのか」

悔しさに拳を握り締める。この寮長には多分一生勝てない気がする。

「まあ、屈するなんて人聞きが悪い。これはお願いですよ。同級生で同じ寮生の彼女にまともな学園生活を送つて貰いたい、健気な女子生徒のお願いです」

健気ってそんな意味だっけ。念のため帰つたら辞書を引いてみよう。思い違ひはあるからな。

「乾さんも、普通に過ごした方が生きやすいんですよ。私が見る限り、あの子は『ぐぐく』普通の女の子ですから」

不意に彼女は柔らかな表情を見せた。これまでの作ったような顔つきとは違う、自然で優しい表情。

確かに正規の制服を着たことで、乾はクラスに溶け込んでいた。もしかして彼女は、それさえも計算に入れていたというのだろうか。「それでもこれが命令だと言うのなら、いつそ取引にしてしまいましょうか」

「取引つて……そつちは何をしてくれるんだよ」

俺は不満を顔に滲ませた。彼女がわざわざ俺に何かをしてくれるとは思ひ難い。

すると彼女はまたまた不敵で妖艶な笑みを浮かべたのだった。

「あら嫌だ。忘れたんですか？ もう、キスしてあげたじゃないですか」

先程の口移しを思い出して顔が熱くなる。

そのまま彼女は保健室を後にした。

更科御影。あれすらも計算づくだったとは、本当に恐ろしい女だ

。

「この危険物（乾のセーラー服）をどうするか。

保健室を出た俺がまず考えたのはその大問題だつた。

セーラー服を小脇に抱え、廊下で立ち尽くす男子生徒の姿はさぞかし滑稽だらう。こんな姿を他人に見られるわけにはいかないが、如何せん逃げ場がない。保健室に戻れば更科が待ち構えているしかといって上手い保管場所も思い浮かばない。

ここは学校。寮生なら自分の部屋に戻ればいいが、あいにく俺は自宅生だ。こんなものを抱えてバスに乗るわけにもいかないし、帰ろうにも財布は教室だ。早退の口実もない。

「つたく更科御影のやつ、とんでもない物を押し付けていきやがった」

悪態をつぐが、どうしようもない。いつそどこかの空き教室にでも隠してしまおうか。そう考えた矢先に、背後から声をかけられた。

「京介、大丈夫……？」

驚いて振り向くと、そこにいたのは空姫だつた。咄嗟にセーラー服を後ろに隠す。心配そうに顔を覗く彼女の額にはつつすらと汗が滲んでいた。

「そ、空姫、どうしてここに！？」

「桜子に京介が保健室に行つたつて聞いて……心配で飛んできただよ？」

空姫は軽く息を切らしていた。おそらく乾の様子を見に教室に出向き、彼女から俺のことを聞いたのだろう。今はちょうど一時限目を終えた休み時間だ。

「そ、そうなのか。大丈夫だよ。ピンピンしてー！」

よもや毒を盛られて意識を失いかけたなどと言つわけにもいかず、俺は大げさに体を動かしてみせた。

それが迂闊だつた。

「京介……それ、桜子のセーラー」

「……あ」

お互い顔を見合わせ、閉口する。焦りからか、休み時間の喧騒が一際大きくなつたような気がした。

「まさか京介、それを盗むために仮病を使つたんじゃ……」

不審そうに空姫が目を細めた。若干後退つているように見えるのは気のせいだと信じたい。

「違、違えよ！ 誰がそんなことするかつ！」

必死に否定するが、空姫は疑わしげな表情を崩さない。

「ホント……？ 中身じゃなくて服の方に興味を抱くなんて僕感心しないな」

すると彼女は何か思い至つたようにはつとして

「もしかして京介、女装癖があつたの！？」

と叫んだ。

「男装癖のお前に言われたくないわッ！」

何の違和感もなしに男子の制服を着こなす輩にだけは言われたくない言葉だ。

「とにかく、別に盗んだわけじゃない。信じてくれ」

何度か懇願するうちに、空姫はしぶしぶ納得してくれた。ついでに俺は、この危険物の処理を彼女に頼むことにした。

「僕がこれを預かればいいの……？ 桜子に返しちゃダメ？」

「それだと俺が社会的に抹殺されるんだよ」

更科御影の手によつて、彼女の場合、直接自分の手は汚さないんだろうな。

「ふーん……。けどまあ、桜子もあの制服で過ごすのは満更でもないみたいだし。折を見て僕が返しておくよ。口実はいくらでも作れるからね」

「すまない！」

その寛容さに俺は思わず頭を下げた。ビビッドの神様や寮長とは大違いだよ。

「ところで京介。なんで桜子がこんな代わり映えのする制服を着て
るか、教えてあげようか」

制服を受け取った空姫は、突然その顔に悪戯心を滲ませる。
その言葉の意図がわからず、俺は逡巡したが

「スケバンだからじゃないのか？」

と、さも当然と言わんばかりに返答した。乾桜子はスケバンだか
ら長いスカートを穿く。いや、長いスカートを穿くからスケバンな
のか？まあどっちでもいい。

すると空姫は抱腹して笑い出した。

「まさか！ 桜子がこれを着てるのは、大切な人から貰った制服だ
からだよ。決してあの子が不良なわけじゃない。当然、スケバンで
もね」

「人から貰った制服？」

言われてみると、セーラー服はずいぶんと使い古された形跡があ
つた。生地はかなり傷んでいるし、所々解れもある。これは数年前、
いや、十数年以上昔の代物だ。ちょうどこのファッションが流行し
た時代。

「つまりこれは、お下がりだつてことか？」

「御名答。貰った制服がたまたまスケバンだったから、桜子はこれ
を着てるだけ」

乾は好き好んであんな身なりをしているわけではない。
「でもどうして正規の制服を着ないんだよ。スケバンでもないのに
お下がりを着る理由ってなんだ？」

校則違反をしてまで、彼女がこれを着る理由がわからない。納得
できずに唸つていると、空姫がその答えを提示してくれた。

「お下がりを着る理由なんて一つだよ。僕には年上の兄弟はいない
からわからないけど、お古を着るのは新品が買えないからでしょ？」

「つまりは節約だよ」

「節約つて……制服まで節約する必要があるのか？」

高校に通うからには学生服は必要経費だ。嗜好品を削ることはあ

つても、制服を我慢する必要なんてあるのだろうか。

「あの子はあるの。けどここから先は本人から聞いてね。そこまでのプライバシーは明かせない」

彼女は唇に人差し指を当てて、片目を軽くつぶつた。

「そこまで言つておいてそれかよ……」

俺は思わず苦笑いを返した。とんだ生殺しだ。

「あれ、結構ヒントはあげたはずだけど」

すると彼女が戯れに笑う。ヒントって何だよ、ヒントって。どうにも腑に落ちないな。そもそもなんで空姫がこんなことを教えてくれるのか。

「桜子のこと、好きなんでしょう？ 応援するよ。僕のできる範囲ですね」

「なっ！ 違つって言つてるだろ！」

くつくつと笑う彼女に俺は絶句した。そりや、神子との契約があるからそう映つたのかもしれないけど、完全なる誤解だ。

しかしそんな訴えをヒラヒラと受け流し、空姫は廊下の奥へ歩いて行つてしまつた。

彼女の誤解を解くにはしばらく時間がかかりそうが、セーラー服を引き渡したことで窮地を脱することはできた。

「でも、その場しのぎだよなあ……」

依然として、俺は途方もない状況に置かれている。

神子との約束により、俺は乾桜子と子供を作らなければならぬ。それは彼女自身の願いだという。

「……ん？ でもおかしいな」

そこで俺は、ふとした疑問を抱いた。

乾が月島神子を参拝した時、当然彼女は俺のことを知らない。そんな俺と子供を作りたいなどと思うわけがないのだ。

つまり彼女は、誰もいいから子供を作りたい、と願つたことになる。

だが彼女はクラスでは人を遠ざけるばかりで、子供どころか恋人

を作ろうとする気配は微塵もない。これは明らかに矛盾するのではないだろうか。

神子の強引な態度に思わず事を引き受けてしまったが、そもそも彼女の主張からして釈然としない部分がある。本当に乾は、そんなことを願つたのか？

悩んでみたところで答えは出ない。俺は乾が参拝した場に居合わせてなどいなかつたのだから。

「……よし」

ひとしきり思考した俺は、廊下で一人、顔を上げる。
ならばいっそ、乾に全部聞いてみればいいのだ。

教室に戻ると、クラスメイトからの熱い視線を感じた。女子からは何やら落ち着かない眼差し。男子からは、それとなく殺意を含んだ眼光。

気付かないふりをして席に戻る。どうやら乾一人では先程の疑惑を晴らすことはできなかつたらしい。

「あの、乾さん」

席についた俺は、控えめな声量で声をかけた。しかし彼女はそっぽを向いて、念佛のように何かを呟いている。

「こいつとは他人こいつとは他人こいつとは他人」

一体クラスの女子に何言われたんだ……。

仕方がないので、俺は意を決して本題を切り出すことにした。

「月島神社という廃神社に心当たりはないか？」

こんなわけのわからない状況に陥つたのは、他でもなく月島神子との契約が原因だ。俺は神子の力によつて星条学園に合格し、それと引き換えに神子の頼みを引き受ける約束だつた。神子の頼みとは、月島神社に参拝した乾桜子の願いを叶えること。その願いは「子供を作る」という十五歳にしては突拍子もない願いだつたのだが、そもそもその内容自体、不可解な点が多い。

ならば本人に訊くのが一番よい。彼女が何を願つたのか、当然彼

女は知つてゐるのだから。

すると案の定、月島神社の名を聞いた彼女が静止した。明らかに心当たりのある反応だ。

「そしてそこで、奇妙な女の子の声を聞いたとか……」

「アンタ……なんでそれを」

彼女は血相を変えて振り向いた。ひどく驚いた顔をしてゐる。まさか神子にも心当たりがあるのか？

「俺もあの神社に行つたことがあるんだ」

それ聞いた彼女は狼狽し、教室の様子をきょろきょろと見回した。内容とは関係なしにクラスメイトたちは俺たちの会話に傾聴していくが、聞かれて困ることもあるようだつた。

「とにかく、ここじや人が多いから外行くわよ！」

前触れもなしに立ち上がつた乾は、いきなり俺の腕を掴んだ。

「ちょっと、授業はどうすんだよ」

そのまま教室の外まで引つ張られる。他の生徒は呆気に取られた様子で一連の動作を見守つていた。

「今はそれどころじゃない。つたく、またみんなから変な誤解されるじゃない……」

始業ベルが鳴り響く廊下を、乾に引かれて進む。一人してのサボタージュを目撃した彼らの間にどんな噂が立つのか、あまり考えたくはなかつた。

「で？ なんだってあの神社のことを話すのよ」

乾は仏頂面でこちらを眇めた。場所は一階の多目的室。この時間は空き教室らしく、辺りに人影はない。俺たちはちょうど外から見えない位置に、互いに離れて腰掛けっていた。

「それは……その……」

率直に訊ねられ、俺は言葉を濁した。神子のことを話しても、おそらく全てを信じて貰うのは不可能だ。彼女が鏡の中にいる神様の話を鵜呑みにするとは思えない。

「むしろお前はどこまで知ってるんだ？ 奇妙な女の子の声に心当たりがあるみたいだつたけど……」

丸椅子に座る彼女を見る。流麗な黒髪は光沢を放ち、彼女の端正な顔立ちが余計に際立っている。普段は面妖なスケバンスタイルだが、改めて見るとこいつは相当の美人なのだ。

「……別に、ただ『願いを叶えてやるから契約しろ』って声を聞いただけよ。私の聞き間違いかもしれないし、誰かの悪戯かも」

自信なさげに彼女は呟いた。この様子では、おそらく拝殿の中まで足を踏み入れてはいないのだろう。彼女は参拝の直後、あの時と同じように神子の声を聞いた。そして俺とは違い、そのまま境内を後にしたのだ。

「……その願い事は、『子供を作りたい』……だつたか？」

「はあ！？」

それを聞いた彼女はひどく喫驚した様子で両眉を上げた。そして強姦魔に直面した少女のごとく、自らの体を隠すようにして抱く。完全に勘違いされたみたいだ。

「ホント、アンタ変態ね。我まだ十五よ？ 何が間違つて安産祈願なんてしなきゃなんないのよ！」

彼女は声を荒げて俺をするべく睨まる。やや距離をとつてはい

るが、おぞましいことには変わりない。どうなつてんだ神子。話が全然違うじゃないか。

「いや、安産祈願とはまた違うんだけど……」

彼女の不機嫌が手に取るようにわかる。殺されたくはないので、とりあえず俺は話頭を転じた。

「けどなんでわざわざあんな辺鄙な場所に？ 神社なら他にもいっぱいあるだろ？」「

俺が合格祈願の参拝に用島神社を選んだのは、受験期の人混みを避けたから。そしてどうせなら奇を衒おうとした結果だ。しかし彼女が似たような理由での場所を選んだとは思えない。

「……私はただ受験の時に、あの廃神社には『ご利益がある』って聞いたから合格発表のついでに寄つてみただけよ。特に大きな意味はないわ。今考えてみたら、唐突に神社の話なんかして妙な奴だつたけど……」

あの写真は合格発表の日だつたのか。発表は三月。確かに時期は一致している。というか用島神社に『ご利益がある』なんて話があるのか。まあ俺はあの神社のおかげで合格したけど、あの場所にいるのは決して『ご利益がある』そつた神様ではないぞ。『テララメな噂があるもんだ。

「じゃあ……なんてお願ひしたんだ？」

神子の依頼はあくまで乾桜子の願いを叶えることだ。それが達成できればわざわざ子作りなんて無謀な要求には答えずに済む。大体、彼女はそもそもそんなこと願つてないと言い張つている。

「なんでそんなことアンタに教えないといけないのよ」

彼女はすげなく言つた。当然の反応だ。神社で何を祈願したかなんて、普通他人に教えるものではないわな……。

「それがあの神社の神様に、自分の代わりの乾の願いを叶えろって言つてさ……はは」

「……へー……」

正直に答えたのに、めっちゃ不審そうな顔だ！

「で、あの女の子の声がその神様だつて？」

呆れたように乾が言つた。鋭い。さすがは天下の星条生だ。

「いや、信じられないのはわかつてゐけどさ。信じてもらわないと困るわけで……」

そうじやないと神子に何をされるかわからないからな。

「でもそれをアンタが聞いてどうするのよ」

彼女は警戒を強めた。俺が何か企んでこると思つてこらへし。

「手伝うよ。俺にできる範囲でなら、何だつてする」

俺はまつすぐに答えてみせた。これは本心。別に人助けは嫌いじゃない。神子との契約は関係なくとも、彼女には一晩泊めてもうつた貸しもある。

すると乾はバツが悪そつに顔を逸らした。指で眉間を押さえ、やがて諦めたように溜息を吐く。

「……別に手伝つてもらうようなことじやないわ。それに手伝いようがない。私の願いは『幸せな家族を作ること』だから

「幸せな……家族？」

そう訊ねると、彼女はしまつたといふ様子で天井を仰いだ。

「つたく。なんでこんなこと話しけりやつのかしら。涼子の時と同じよ。アンタといふと調子が狂う」

彼女は悪態をついたが、そこまで機嫌を損ねたようにも見えなかつた。

しかし幸せな家族……か。性格に似合わぬずいぶんと可憐らしくい願意事だな。

「確かにそれじや、俺の協力は及びではないわな」

俺は諸手を挙げて降参のポーズを示した。彼女の将来設計に俺が絡んでくるとはとても思えない。

「誤解しないでよ。家族と言つてもね、別に誰かと結婚して一般的な家庭を築きたいって意味じやない。私の言つ家族っていうのは、もつと広い意味での家族なの」

「広い意味での……家族？」

彼女の言わんとしているところがわからない、思わず聞き直してしまつ。

乾はしばらく答えあぐねていたが、やがてゆっくりと話し始めた。
「私はね。児童養護施設の育ちなの。生まれてすぐ親に捨てられて、そのまま施設で育つたわ」

普段と変わらない調子で彼女は言った。まるで何気ない世間話のように、それが、当たり前であるかのよつて。

「う、ごめん……」

咄嗟に俺は謝罪していた。そうすることが礼儀だと思った。しかし「どうして謝るの？ 私にとつては別に当たり前のことだわ。そうやって安易に謝るのは、逆に失礼じゃないかしら」

叱責や苛立ちもなく、彼女はただ平板な口調で語った。言われるのも言うのも、慣れ切つてしまつたような仕草だ。

「じゃあ……本当の両親のことは

「知らないわ。顔も名前も」

彼女はあまり感情の籠らない声で即答した。

「特に知りたいとも思わない。昔は知りたいとも思つたけど、探し出したところでどうしきつて話だし、施設には父さんも母さんもいたから」

少し困つたように彼女は笑んだ。両親ともに健在の俺には実感がない話だ。もし自分の親が突然いなくなつたら、俺はどう思うのだろうか。そんな想像すら、すぐには思い浮かべることができない。

「私は世に言う普通の家庭つてものを知らない。涼子みたいな普通の家族を話に聞くことはできても、血の繋がりつていうのがどんなものなのかよくわからないの。だって私には血の繋がりがないのが普通だから」

「それがお前の言う、広い意味での家族つてことなのか？」

「私にとつては施設のみんなが兄弟で家族だもの。私が作りたいのは、自分の家と同じような家族。私は将来、自分が育つたような施設を作りたいの。だから星条に入つて勉強してる。嫌じやない？」

学がないのを施設育ちのせいにされたり、いちいち周りからやっかまれるのは」

気のせいか彼女の表情に少し翳りが見えた。おそらくはそれは仮定の話ではなく、彼女自身の経験談なのだろう。これまでにも嫌な思いを沢山した。だからこそ彼女は難関校と呼ばれる星条学園を受験し、見事に合格したのだ。

「でもうちは私立でしょ？ 公立よりもお金がかかるから、色々節約しなくちゃで大変よ」

軽く渋面してみせた彼女に、俺は気付いた。

「節約って もしかして指定の制服を着なかつたのは、ぱつと空姫の言葉を想起する。乾が指定外のセーラーを着るのは節約のためだと。

「そうね。制服って案外高いのよ。だから昔施設にいた人のお下がりを貰つたの。両親からは反対されたけど、事実うちにはお金がないんだもの」

昼休み、彼女の昼食がいつもおにぎり一つだけなのを思い出した。私立高校は公立に比べて授業料も高い。ただでさえ彼女は寮に入っているのだから、学生生活を送るための費用は馬鹿にならないだろう。そのため彼女は食事でさえ僥倖していたのだ。彼女の机に必要な物がなかつたのも、買えなかつたからなのだ。

「うちには他にもたくさんの子供たちがいるの。私だけ金食い虫じやいられないでしょ」「う」

一般的に長女や長男は下の兄弟のことを考えると言われるが、彼女の場合、その域は優に超えていくように思えた。血は繋がらないはずなのに、彼女が義理の兄弟を想う気持ちは、もしかしたら血の繋がつた兄弟よりも深いのかもしだれない。もちろん、それは単なる俺の憶測に過ぎないのだけれど。

「もしかして昼休みに見てた手紙って、その施設の子供たちからの

……？」

昨日、乾が眺めていた手紙。あの安らかな笑みは、子供へと向け

るそれだつた。

「前は私より年上の人もいたんだけど、いつの間にか私が最年長になっちゃって、今ではまあお姉ちゃんみたいな扱いね。それが突然寮に入つたもんだから、寂しがつてしまつちゅう手紙をくれるのよ」困つたように彼女は笑つていただが、どことなく嬉しそうに見えたのは氣のせいだろうか。

「でもなんでよりによつてスケバンなんだ？　スカートの丈を短くするぐらいできただろうに」

よくよく考えればそうだ。短すぎるスカートを長くすることはできないが、長い分を短くするには切れば事足りる。ならばどうして彼女はそうしないのか。

すると乾は、やや恥ずかしそうに俯いた。

「だつてかつこいいじやない」

端正な横顔が珍しく紅潮している。

「ん。聞き間違いだらうか。もしかして今、かつこいいつて言つた？」

「スケバンが！？」

俺は外が授業中だといふことも忘れ、大きな声を上げてしまった。

「何よその顔！　これは私の憧れの人人の格好なんだから！」

「憧れの人つて……」

まさかヨーヨーを武器に戦うアレージやないよな。いや、俺も再放送を見ただけでよく知らないけど。

「言つたでしょ？　あの制服は昔うちの施設にいた人の物だつて。私が入つた頃はすでに施設を出た人だつたんだけど、ちょくちょく施設に遊びに来てくれるのよ。だから私はその人のことをよく知つてた」

少しだけ気恥ずかしそうに、彼女は遠くに目をやつた。

「小さい頃は泣き虫だつたの」

「ん？　誰が？」

前触れもなく飛び出した言葉に思わず聞き返すと、彼女は軽く俺を睨んだ。

「私がよ」

疑いの目を向けると、さうじやロリと睨み返された。いや、だつて、あまりに想像がつかないものだから……。

「さつき私は生まれてすぐに捨てられたって言つたけど、それでも小さい頃はなんとなく親のことは覚えてたの。母親のお腹の中の記憶つて、一歳ぐらいまでは覚えてるって言うじゃない？ その記憶はもちろん時間と共に薄れていくんだけど、なんとなくわかつちやうのよね。足りない、って」

「足りない？」

想像もつかない感覚だった。

「うちには子供の生い立ちを隠さないポリシーだつたから、その違和感もすぐに形になつたわ。ああ、私にはお父さんとお母さんはいるけど、パパとママはいないんだつて」

決して明るくない話題を懐かしそうに語る彼女は、ここではないどこか遠くにいるように感じられた。でもさつき彼女から言われてしまつたように、それを可哀想とか、氣の毒だとか簡単に思つてしまは、きっと失礼になるんだろう。

「だから毎晩のように一人で泣いてた。ぽつかり空いた穴を埋める方法もわからなくて、夜中で施設を抜け出そうとしたこともあるわ。きっとパパとママを探しに行つたんだと思つ。探したつて、顔も名前もわからないのにね」

彼女によく似た小さな少女を想像する。小さな体を震わせて、よく知らない外の世界に飛び出すのは、きっととても怖かったんじゃないだろうか。

「そんな時、あの人に会つたの」

ふつと彼女の表情が柔らかくなつた。例の制服をくれた、施設の出身者という人か。

「ボランティアとして施設に遊びに来てくれたんだけど。最初は怖かつたわ。他の人よりも目付きが鋭いつていうか、背負つたオーラが禍々しいというか……」

真面目な話をしてるところでなんだが、彼女の黒々としたオーラの源流を垣間見て少しそうとしてしまった。許せ乾。これは生存欲求という名の本能なんだ。

「どうかその人こそ正真正銘の元スケバン、なんだよな。若い頃はブイブイ言わせてたわけ」

「でも話してみるととてもいい人だつた。女でも強くてかつこいいし、悪いことをすれば母親以上に厳しく叱つてくれて、怖かつたり寂しかつたりする時は『大丈夫よ』って優しく抱きしめてくれる、お姉さんみたいな人だつた。そして何より、彼女も私と同じような境遇で育つたんだって教えてくれたから、両親とは別の意味で信頼できたのかもしない」

同じ境遇で、若い頃はスケバンだつてことは、その人も色々と辛い経験をしてグレてしまつたんだろうか。でも大人になり、自分と同じような子供を正しく育てる道を進んだ。その人がどんな人柄なのか実際に会つたことがないのでわからないが、乾が憧れるのも無理はないと思つた。

彼女の芯が強いのは、きっとその人のおかげなのだ。

「だからその人がうちの出身者だつて聞いて、嬉しかつた。施設にはアルバムみたいなものがあつたんだけど、少しでもその人のことを知りたくて、写真を探してみたの。そしたら」

「スケバン時代の写真を見つけた、と」

「そう。すごくかっこよかつたのよ」

目を輝かせた彼女に俺は見て見ぬふりをした。うん、みんな人の好みをとやかく言つちゃいけないぞ。

「だから星条に合格した時、思い切つてその人に頼んでみたの。制服を下さつて」

突然そんなことを言われたら面を食らうだろ? その人も災難だな。

「私もある人みたいに強くなりたかった。かつこよくなりかつた。もちろん、さつき言つた節約つて意味を含めてだけど」

おそらくは渋々その人を承諾させ、憧れの人の制服に袖を通した時、彼女は何を思つただろうか。

「強くなりたいって思つた。血の繋がりがなくたつてあの人みたいに強くいられるんだって証明したかったのよ」

その決意が、入学当時の彼女の姿だったのだ。

周りとは違う衣服で身を包み、あえてクラスに溶け込まず、他人を遠ざけた。教室で睨むようにただ前を見つめていたのは、自分が孤高であるうとするサイン。

「でもまあ。あまり上手くいかなかつたかもね。私はあの人じゃないし、そんなに強くもない。それに考えてみれば、高校に入つたらもう相手の家族関係なんてどうでもいいのよ。小学校や中学の頃とは違う。授業参観も親の参加が必須の行事もないし、そもそも私の生き立ちを知る人もいない。そんな中で一人だけ気を張つても、誰も見ちゃいないのにね」

波のない穏やかな表情で彼女は自嘲した。

「結局、血に囚われていたのは周りじゃなくて、私だつたのよ」
もはや清々しく彼女は言った。

こうまであつさり自分の信念を捨てられる人を魅力的に思わない人間なんて、多分いないだろう。

「乾は……強いよ、俺よりもずっと。それに、優しい人だと思う」「な、何よ……いきなり」

素直な感想を述べると、彼女は照れくさそうにそっぽを向いた。

「とにかく、これが私に話せること全部よ。私の願いは私自信で叶えてみせる。アンタの手を借りる必要はないわ。残念だつたわね」
残念も何も、本人が自分で願いを叶えるというのならわざわざ俺が手伝う必要もなくなる。本来初詣なんかは「祈願」ではなく「決心」のためにあるだなんて聞いたこともあるし、乾にとつて願いとは自らが叶えてこそ意味があるんだろう。こちとら神頼みで合格した身……箴言痛み入る。

「わかつた。色々教えてくれてありがとう」

神子が叶えようとした願いも杞憂だったわけだ。神が何もしなくても、人間は勝手に自ら願いを叶えていく。ひょっとしたら人間は何千年も昔から、ずっとそうやって生きてきたのかもしれない。

俺が素直に礼を向けると、彼女は心なしか照れくさそうに視線を逸らした。

「だ、だからさっきのは別にアンタが結婚相手としてダメとかそういうわけじゃなくて　いや、何言つてんの。ダメに決まってるじゃない。どうしたんだ私は。今のは忘れる」

急に一人でうろたえ始めた彼女は、突然は殺意を含んだ目で俺を睨みつけた。

「……え？　何の話だっけ？」

忘れろと言われても、どの経緯で話された言葉なのか見当がつかなかつた。

「いいから忘れるッ！」

彼女は勢いよく立ち上がつた。どうしてだか顔が真つ赤だ。スケバン服を着ようが着まいが、例の黒々としたオーラが背後に立ち込めている。

「いや、そこまで言わると気になるんだけど…………」

言つてから、俺はしまつたと思つた。

彼女が肩をわなわなと震わせて、今にも俺を殺しそうだったからだ。ああ、そうだ。これは　百一人を殺した人間の目だ。

「だから忘れるって言つてんでしょうがッ！」

察した直後、乾桜子の上段回し蹴りが俺の顔面に炸裂した。

「……とこ'うことだ。俺がわざわざ手を貸す必要もないってや」
まだ一限目が終わるには時間があつたので、俺は一階の男子トイレを訪れていた。一階に通常教室はなく、授業中といつことも相まって他にひと気はない。謎の逆鱗に触れ、三度乾に氣絶させられた俺だったが、目覚めたのは数分後だった。どうやら人間は慣れていく動物らしいが、あの暴力を受けつつも意識を失えないようになつたらそれはそれだ問題だ。

俺の眼前、薄汚れた鏡の中では、月島神子が不服そうな顔を作つていた。

「そうか……ならば仕方がないのう」

乾桜子の願いは、わざわざ他人が叶えるものではない。事情を聞いた神子は、渋々とそれを納得した。

「そもそも何がどうなつて乾の願いが『子供を作りたい』になつたんだよ。おかげで乾には散々……」

思い出したくない記憶を本能がシャットダウンする。神子に会つて以来、何度も恐ろしい目に遭つたことか。

だが当の彼女はふんぞり返つて、こちらを叱責した。

「何を言う。幸せな家族を作りたい。それすなわち夫を迎える子を作るということではないか！」

「ずつこけた。

「短絡的すぎるんだよっ！」

薄々感じていたが。こいつは人間の機微といつもの履き違えている。おかげでどれだけ迷惑したか。まったく。

「ともかく、これでもう契約は終了だな。乾に協力する理由はなくなつたんだから」

乾と子供を作るなどというとんでもない使命から解放され、ようやく肩の荷が下りた。一時はどうなることかと思つたが、これで一

風も一風も変わった神様との付き合いは終了だ。

「一体何を言つておる。そなたはわらわの願いを何一つ叶えておらぬではないか。それで契約満了とは片腹痛い」

ちゃんぶ台の上の湯のみをすすりながら、神子は哄笑した。

「だつて乾のことはもう済んだじやないか！」

「乾桜子のことはもうよい。参拝に来ておいて神の力がいらぬなどという罰当たり者など放つておけばよいのだ。わらわにはまだまだ信者がいるのだからな」

居丈高に彼女は笑つた。端麗な身なりも合わせつて、まるでお伽話に登場する高慢ちきなお姫様のようだ。

「と、言いますと……？」

嫌な予感がした。できるなら今すぐこの場を逃げ出したいが、神子には恩義があるし、逆らえば退学させられてしまつ。俺は彼女の発する言葉ができるだけ穩便なことを願つて、恐々と彼女の顔色を窺つた。

「これだ！」

自信満々に叫んだ彼女は、懐からまた一枚に写真を取り出した。向こう側から鏡に押し付けられたその写真には、前回と同じく月島神社と思しき場所で参拝に耽る人影が写されていた。

またも自分と同じ年頃の人物。頑なに目を瞑り、熱心に祈るその姿は、そこに込められた願いの強さを示している。

凛々しさが伴つた少年……いや、これは。

「空姫じゃないか」

見間違はずもない。そこに写されていたのは空姫涼子その人であつた。

「知り合いなのか？　またまた話が早いのう」

僕倅と言わんばかりに、神子がまたバサツと扇子を取り出す。お

前は殿様か何かか。

「知り合いというか……。空姫まであの神社に来てたのか。一体何なんだあの廃神社は……」

円島神社はどこからどう見ても捨てられた廃神社だ。そんな場所にいつも参拝者が訪問するとは。しかもどちらも俺の知り合いだ。

偶然にしては出来すぎている。

「ええい、つべこべ言わざわらわの話を聞くのだ！ そなたはこやつと

「待つた待つた待つた！！」

神子が言いかけた言葉を俺は無理やり遮った。

「まさかまた子供を作れって言つんじやないだろうな。いい加減勘弁してくれよ！」

乾の時は流れで了承したが、今度ばかりははつきり断つておかないと身が持たない。空姫が温厚な性格だとして、彼女のそばにはルームメイトの乾がいる。もし空姫に「子供を作ろっ」なんて言おうものなら、今度こそ乾に殺されてしまつ。

「つるさい輩だのつ……。いやつはそのようなことは願つておらさん」

神子は耳を塞ぎながら不快感を示した。

「だったら何だっていうんだ」

「いいから聞くのだ。こやつの願いは

紡ぎ出される言葉に俺は息を飲んだ。できるだけ無難でありますようにできるだけ無難でありますようにできるだけ無難でありますように。

「たとえ僕がいなくなつても、どうか涼子が幸せでありますように

「……は？」

神妙に告げた彼女の言葉に、俺は数秒置いて呟いた。

「空姫が、自分自身に対してもんなことを願つたのか？」

「いくら彼女が変わつていてもはいえ、自らそんなことを願つどうか。

「こやつは涼子と言つのか？」

不思議そうに神子は訊ねる。

「そうだよ。見間違つわけない。これはうちの学校の空姫涼子だ」

「ならばおかしいではないか。自分がいない世界で改めて自らの幸

せを願うのか。こやつは変わった奴じゃの

「確かに……何かおかしいな」

隠し撮りの写真に写し出された彼女は紛れもなく俺が知る空姫涼子だ。だが神子が嘘を吐いているように見えない。

またもやよくわからない願いを突きつけられ、俺は困惑を余儀なくされた。

「何がおかしいのですか?」

背後からの声に俺は答える。

「だつてそうだろう。自分に対するご利益を願うにしても、わざわざ『涼子が』なんて他人行儀な言い方 ってなんでここにいんの!?」

振り向いた俺は、そこにいた人物を見て驚嘆した。眼鏡をかけた三つ編みの少女。一見淑やかそうでいて、そのうちは腹黒。女子棟寮長、更科御影だった。

「なんで、と言われましても、あなたの様子を伺いに

「いやいやいやここ男子トイレですから!」

「そんな些細なことを気になさるんですか? 橘さんは意外と狭量なのですね」

涼しげな表情を崩さない彼女に、俺ははつとした。今、トイレの鏡には神子が映っている。俺は彼女の前に立ち塞がり、慌てて鏡を隠した。こんなものを見られて、一体どう説明すればいいんだ。

「あら、何か見られては困るものもあるんですね?」

「な、何もないって」

前に乗り出そうとする更科を必死に制する。自然と彼女と接近する体勢となり、顔と顔が近づいた。

彼女の瑞々しい唇が視界に入る。先程、俺の口に直接水を注いだ薄桃色の花唇。否が応にも、あの時の柔らかな感触が蘇る。てかよく考えれば、あれって俺のファーストキスじゃないか!

「隙あり」

更科が意表を衝き、俺の肩越しに向こうを見た。踵を上げ、半分

俺に寄りかかっている。必然的に柔軟な体が密着し、体が硬直してしまった。

「あら、何もないですか？」

しかし彼女は至つて平然に言った。よかつた。神子が自ら隠れたのだろうか。だが体勢が体だけに、彼女の湿っぽい吐息が耳に当たり、その度に心臓が跳ねる。服越しに体温が伝わり、それだけでどうにかなってしまいそうだ。もしかしてまたわざとか。また俺に妙な取引を持ちかけるんじゃないだろうな。

「ところで」

更科はすとんと俺から離れ、こちらを見据えた。離れ際、彼女の顔が少し綻んでいたように見えたが、気のせいだろうか。

「乾さんの制服は無事に処理できましたようですね」

俺が例のセーラー服を手にしていないことを確認し、彼女は満足そうに頷いた。

「まあ、なんとかな。つていうか自分から押し付けておいて何を今更」

「あらあら、そのような怖い顔をなさらないで下さい。あれは公平な取引だつたではありますんか」

「どこが公平な取引だ！ むしろ一方的な蹂躪だつたじゃないかっ！」

あれが公平な取引なら公正取引委員会も必要ない。

「細かいことは気にしない」とです、

「……そこですか？」

相変わらずの涼々とした態度に、俺は逆らうのを止めた。

「さきほど、教室での乾さんの様子を覗いてきました。意外と上手くやれているようですね。あれならば素行を乱すこともなさそうですし、安心しました」

寮長として、寮生が風紀を乱すと内申に関わると彼女は言った。だが言いながらにつっこみと微笑んだ彼女は、どことなく、その口実の範疇を超えているようにも思えた。ただの思い違いかもしない

けど。

「そうだ、更科。ちょっと空姫について聞きたいんだけど」

「なんでしょう」

神子との契約もある。ちょうどいい機会だ。寮長である彼女なら空姫の事情について何か知っているかもしない。

「あいつがなんで男装をしてるか、お前知ってるか？」

たとえ僕がいなくなつても、どうか涼子が幸せでありますように。

空姫が自分自身に抱いた奇妙な願い。それに「僕がいなくなつても」というフレーズはどことなく不穏で、気になってしまったのだ。

「うーん、そうですね」

更科が両手の指を合わせて思案する。中身がアレなのに、いちいち可愛氣な仕草を取るので始末が悪い。

「わかると言えばわかりますし、わからないと言えばわからないです」

「すいぶんと曖昧な考え方だな」

いつもの超然とした態度から、自然と更科は何でも知っているようになっていた。当然だが彼女も知らないことがある事実に、不思議な感覚を抱く。

「正確に言えば、彼女に関わるとある事情は掴んでいます。ですがそれが彼女にとつてどんな意味があるのか、どうしてあのような殿方の格好をしているのか、私にはわかりかねます」

事情までは知ってるのね……。前言撤回。こいつに知らないことはない。

「でもどうして彼女に固執するんです？ もしかして、もう乾さんから乗り換えたのですか？ 一度関係を持つたらあとは用済みだなんて、橘さんはすいぶんとふしだらなお方ですね」

「どうやつたらそんな解釈に至るんだよ！ それがあいつとは何もねえよ…」

神子のことを話せばやいやくなる。やっぱり更科には黙つてしま

」つ。

「そうですね。空姫さんのこと�이知りたいというのならちょうどいいです。乾さんと同じように、あの方の服装も更生して頂けないですか？」

「更生つて……。前は空姫の服装は大丈夫だつて言つてたじやないか」

「また厄介ごとを押し付けるつもりか。

「大丈夫とまでは言つてません。危急の課題ではないと。それに乾さんほどではないとはいえ、空姫さんの服装にも先生方は手を焼いています。何度注意しても頑なに断つていると」

星条学園は私服制ではない。当然服装は決まっている。男子には男子の制服、女子には女子の制服がある。しかし意外だ。空姫がそんな強引にあの制服を着ているとは。そりや、当然乾も空姫も注意はされていただろうが、気の強い乾はともかく、あの空姫が敢然と教師たちの指示を無視する姿はなかなか想像がつかなかつた。

「だからつて、俺があいつの服装をどうにかするのは気が進まないな。俺は別に空姫の服装が悪いとは思つてないし」

校則に違反しているとはいえ、空姫は誰かに迷惑を掛けているわけでもない。教師ならば当然叱りつけるのだろうが、一友人の俺がどうこうする問題でもない気がする。第一その必要性を感じない。

それを聞いた更科は、突然何かを諭すような口調で話し始めた。

「服装というのは、内面の表れです」

「はい?」

「服装に限りません。日常の仕草や態度、口調から何まで、表面上に現れた動作はその人の内面の何かしらを示唆しています」

なんだなんだ。どつかの偉い人の言葉か? 難しいこと言われてもわかんないぞ。

「乾さんの件だつてそうです」

「なんでそこで乾の話が出てくるんだよ」

仏頂面で訊ねた俺に、彼女はまるで年上の家庭教師のような仕草

で答えた。

「彼女は心に何らかの問題を抱えていた。事情はあれど、だから彼女はあのような面妖な姿をしていました。人を寄せつけない、寄せつけたくない境遇が彼女にはあった」

乾は自分が児童養護施設の育ちだと言った。血の繋がつた家族を持たず、だが必ずしも家族に血縁はいらないという思いを抱いている。いざれは彼女も、自分が育ったのと同じような施設を作りたいと彼女は言った。未来に對して前向きな彼女だが、その境遇が彼女の過去に何らかの影を落としているようにも見えた。更科の言葉が全て正しいとは思わないが、その経験が、他人を寄せつけたくないという気持ちを抱かせたのかもしない。

「でも逆に、普通の制服を着た彼女にクラスメイトたちは心を開きました。彼女たちはもともとは乾さんと打ち解けたいと思っていたのです。そして服装の変化から、乾さんの心の内に起きた何らかの変化を読み取った。表面上の変化から内心を読み取る……いわば逆説的な結果ですね」

「心の内の変化って何だよ。乾は今までと変わらずに生活してたじやないか」

更科の策略で正規の制服を着ることになつたが、それまでに特に何かが変わったとは思えない。

「あら、相変わらず鈍感ですね。公共の場にも私的な場にも、一人の異性が突然踏み込んで、心に変化を来さない女の子なんていませんよ」

「人の異性つて……そんな奴いたか？」

「乾さん本人もまんざらではなさそうです。つまりあれが彼女が本來ありたかった自分の姿なのですよ。今回のこととは、単なるきっかけ過ぎないんです」

「……何が言いたいんだよ」

「空姫さんも同じではないか、ということです」

彼女の提案に、俺は思わず眉を顰めた。

「空姫が無理して男の格好をしているってのか？ 僕にはそつは見えないけど……」

体はどうであれ、言動は男みたいな奴だし、嫌々やつているようには見えない。

「どうでしようか。憶測ですが、彼女は別に心と体の性が一致していない方ではないように見えます。それなのにわざわざ教師に逆らつてまで殿方の制服を着るのにはわけがあるはず」

「空姫が単に変わった趣向の持ち主なのかも」

「そうかもしません。でもそうではないかもしない。だから橋さんには乾さんの時と同じように、今度は空姫涼子の動向も探つて欲しいのです」

「……更科の考えはわかつた。空姫に何か事情がありそうなのは俺も思つていたところだ。けど

「自分がする必要はない、と？」

「ああ。そんなに気になるんなら自分で調べればいいじゃないか」
わざとつっぱねるように言つ。これ以上に面倒に巻き込まれていたは多分体が持たない。

「そうしたいのは山々ですが、私はあの一方には警戒されています」

確かにまあ、仲のよい友人には見えなかつたけど……。

「それにあなたを従わせる方法ならいくらでもありますから」

満面の笑みを向けた彼女に、俺は背筋が凍つた。また何か企んでいやがる。そう言えば寮での写真はまだ彼女が所持していた。あれを学校中に公開されでもしたら……。

「寮で問題があれば、寮長である更科も困るんじゃないかな？」
そうだ。内申にも響くかも

自信満々な彼女に俺は戦々恐々と話しかける。死ねば諸共。この痛み分けは彼女も望まないだろう。

「まさか。あの写真だけで一人の人間を傀儡できるとは考えてませんよ」

その時、ちゅうじチャイムが鳴った。一限目が終了したのだ。今は教室で授業を受けている生徒たちも、もしかしたらここにやつてくれるかもしれない。

すると何を思つたか、更科は制服のタイを解き、ブラウスのボタンを順々に外し始めた。

「なななな何やつてんだよ！　こんな所で！」

はだけた衣服から彼女の白い肌が覗く。乾や空姫ほど発育がないわけではないが、わずかに見せたピンク色の下着と控えめな膨らみは、彼女の清純そうな見た目も相まって、何とも言えない扇情を孕んでいる。

「た、橘さんが……嫌がる私を無理やり男子トイレに連れ込んで……」

「何を説明してんのだ何をッ！」

彼女は急に瞳を潤ませ、上氣した頬をこちらに向けた。

「大人しくしろ。授業中だからここには誰も来ない。俺は服の上からでも構わないんだぜ、ぐへへと……」

「言つていねい！　てか俺はそんな変態みたいな喋り方じゃねえ！」
考えてみるとここのは男子トイレ。更科が自らここに入つたと訴えたとして、一体誰が信じるだろうか。しかも彼女の乱れた制服に、涙を浮かべた表情。状況証拠は整つている。冤罪ルートまっしぐらだ。

「私……汚されてしましましたつ……もうお嫁にも行けません！
あんなに激しくされたら、私つ……」

「わかつた！　わかつたからやめてくれッ！」

結局俺は、再び彼女の要求を承諾してしまつた。思えば彼女が堂々と男子トイレに入つてきた時点で怪しむべきだったのだ。

過去の経験から何も学ばない自分に落胆しつつも、俺は業腹な態度でニヤリと笑んでみせた更科御影を、できつる限り恨めしそうに睨んだのだった。効果は……おそれりく皆無だらうけど。

一限目以降、学生の本分をまつとうすべく、ちゃんと授業を受けた俺は、更科の指示を受けて一度は帰宅した。昨夜外泊した件で母親に小言を言わねながらも、俺は時計の針をちらほらと確認する。自分の意志とは裏腹に、俺は今夜も星条学園に行かなければならない。

正確に言えば星条学園嵐乃寮女子棟に。

八時を過ぎ、じつそりと家を抜け出した俺は、学園方面のバスに乗り込んだ。辺りもうすっかり夜の帳が下りていた。明日学校は休みだが、母親には朝一番で勉強会があると嘘を伝えてるので、早朝部屋のドアを開けて俺がいなくとも、既に出掛けた後だと思ってくれるはずだ。

俺は制服を入れた紙袋を持参して、手には学生鞄を抱えていた。人使いの荒い更科のことだ、事が一日で済むとは限らない。今回の「拘束」が休日を飛び越えた場合、制服や勉強道具がなければ登校できない。無論そうなった場合、俺の小遣いは向こう半年はゼロだろうな……。

「はあ……」

エンジン音が響く静かな車内で青息吐息を漏らす。

こんな時にわざわざ学校に向かう未成年がいるのは不審に見られるかもしれないが、やむを得ない。バスで三十分ほど過ぎた後、学園前で降りた俺を運転手さんが訝しげに見ていたがそれも致し方なし。ちらほらといった乗客はみな山道を抜けた先に用があり、学園の他には何もないこの駅で降りる客など一人もいやしなかった。

「ほんとに何もない場所なんだな」

バスを降り、改めて見回してみても、辺りには深淵が広がるばかりで、ぽつんぽつんと遠い間隔で街灯が並ぶ山道は不気味というよ

り恐ろしかった。静かな虫の声に紛れて、野鳥の鳴き声が響いている。

塀に囲まれた学園の敷地はここからではよく見えない。昼間は当たり前のように学園生活を営む場所なのに、夜というだけで印象がまるで違う。傍からだがまるで刑務所のようにも見えた。

門扉は固く閉ざされている。人一倍騒がしい男子寮生でさえ夜の脱走など考えないというのだから、それだけ警備が厳重なのだろう。もちろん、外に出てもコンビニ一つないことも理由だろうが。

守衛さんに見つからぬよう、俺は西側の塀をぐるりと迂回した。更科御影の言葉が本当ならば、繁茂した草葉に隠れて、人一人が通れる穴があるはずだ。

「すごい量の虫だな……」

流石に山奥、飛び交う虫たちに辟易しながら俺は草木を搔き分けた。泥濘に足を取られ、跳ね水が衣服に付着する。発見される恐れがあるので懐中電灯すら点けられない。これで指定の抜け穴がなければ更科御影にはいくら恨み節を言つても足りん。

しかし程なくして、俺は人一人がやっと通れそうな穴を見つけた。こんなコンクリート壁に一体誰が空けたのか、明らかに自然と出来た穴ではない。

「ここを通るのかよ……」

思わず悪態が漏れる。幸い草むらで汚したのは衣服だけだが、ここで潜れば間違いなく体中が土まみれだ。だが悩んでいても詮方ない。俺は意を決して狭い通り穴を匍匐前進でぐぐり抜けた。

「……つたく、とんだ災難だな」

上体に付いた土を払いながら、俺は顔を上げた。

「捕まらずに済むのですからむしろ幸運ではなくて?」

「うわっ!」

気付けばそこに更科御影が立っていた。

「なんだよ、脅かすなよ」

「あら。あまり大きな声を出されると守衛さんに気付かれてしまい

ますよ？」

人差し指を口に当て、いつもの上品然とした態度で彼女が微笑する。

「こんな暗がりにいきなり現れたら誰だつて驚くわ！」

できるだけ大声を上げぬよう努めて不平を言つ。暗闇で姿は見えないだろうが、彼女の言つ通り音を立てれば詰所にいる守衛さんに気付かれてしまうだろう。

「私はただ、橘さんが迷われぬよう迎えに来て差し上げただけですわ。それとも警備の厳しい女子棟に一人で侵入できるのですか？」あくまで叱責に色を持たず、彼女は超然とした態度で接する。悔しいが彼女に言い返す術を俺は所持していなかつた。

「わかつたよ……案内してくれ」

「もちろんです」

花のような笑みが返つてきた。月明かりに照らされた彼女の面差しは、普段とは違う艶美さを纏つていた。

「この穴、更科が空けたのか？」

ふとした疑問を口にすると、彼女は「まさか」と否定した。

「大昔の生徒が脱走用に空けた穴のようです。かつて全寮制だった時代は学期内の外出が禁じられていたそうですから、その当時の遺産でしよう。うちが全寮制だったのはもう四十年以上前のことですから、相当古いものですね」

「うへえ……学期内の外出禁止か。俺には耐えられそうもないな」

「今でこそ一進学校ですが、かつての星条学園は国に行く末を担う学士が集う学び舎でしたから、今とは覚悟が違うのでしきう。ましては補欠でギリギリ合格した誰かさんは学業に対する思い入れが違うでしょうね」

「補欠でわるー」^jざんした。それにしても、半世紀近くもよくこんなものが残つてたな。普通なら撤去されて然るべきだろに

「噂ですけど、当時の生徒が今の学園長だそうですよ。ひょっとしたらこの穴を空けたメンバーにあの方がいたのかも」

更科がいたずらつぽく笑う。あの禿げ親父が……。ああ見えても昔は悪さをしたんだな。天野も言つていたか。星条生は見つからないうつに悪さをするつて。

「ではこちらです」

作法の行き届いた給仕のように更科が道を促す。男子寮である大きな建物を通り過ぎて、更に奥まった場所に女子棟はある。校舎からは裏手に位置するので、女子寮生以外の生徒が普段行くことはまずない。そもそも女子棟は校舎と隣接した男子棟とは違い物理的に離れているので、案外その存在すら知らない生徒も多い。現につい先日までは俺自身も女子棟のことは認知していなかつた。

「でもまさか、一度もあの女子寮に足を運ぶことになるとはな……」

今朝は眠つている間に運ばれたが、今は自らの足で向かつている。昨夜閉じ込められて散々な思いをしたのに、どうも複雑な気分だ。

「あら、どうして残念がるんです？ 一日も続けて女子寮に潜入できるなんて、なかなかできることではないですよ」

おどけたように彼女が言つ。

確かに、バレたら退学の条件がなく、女子寮の面子がみんな変人でなければ、最高の出来事だらうぞ。

「意外にあつけなく入れるもんなんだな」

脱いだ靴を片手に持ち、俺は板張りの廊下にそつと足を下ろした。女子寮は警備が厳重だと聞いていたが、一階の窓から女子棟への侵入を企てた俺たちには何の妨げもない。空姫たちの話は嘘だつたんだろうか。

「先程寮母さんの部屋にお邪魔して、あらかじめセキュリティを切つておきましたから」

「……普通そんなことできないだろ」

さりとてのけた彼女に呆れつつも、俺は廊下の一帯を見回した。辺りに他の人影はなく、外と同様、静かな空気が流れている

だけだ。女子寮という特殊な場所に気恥しさを感じながらも、一度目という事実が幸いしそれほど狼狽えることはなかった。

「他の皆さんには自室でそれぞれの時間を過ごしているでしょう。さあ、今のうちのこちらへ」

更科に促され、俺は玄関とは反対方向の角部屋に向かつた。空姫と乾の部屋は二階にあったので、一階をじっくりと見るのは初めてだ。基本的な作りは上と同じだが、学生の部屋は比較的少ないようを感じた。代わりに大きめな部屋がいくつか見られた。食堂などの共同空間が一階に集まっているのかもしれない。

「ここです」

更科が案内したのは二階にあるのと同じ学生用の部屋だった。札代わりの白いネームプレートには「一年D組 更科」と記されている。

「あれ？ 一人部屋なのか？」

だがふと俺はおかしなことに気が付いた。昨日空姫は確か、寮は共同生活の場であるため一人部屋が基本と言っていたはずだ。

「ええ。今年の女子寮生は七人ですから、必然的に一人余ることになりますね」

説明しながら彼女は扉を開いた。

「……入つていいのか？」

緊張の唾を飲み込む。まかりなりにも女子の部屋。さすがに躊躇いがある。

「もちろん」

しかし彼女は男子生徒である俺を平然と招き入れた。

更科の部屋は意外と普通だった。上と同様の二人部屋。やはり全体的に質素で、女子の部屋という印象は受けない。一段ベッドの上段は物置として使っているようで、その分だけ空姫たちの部屋よりは広々としている。机は二つ用意されているが、使用しているのは片方だけのようだ。机の上の本棚には難しそうな本がずらりと並んでいた。

「もつと奇つ怪な部屋だと思いました？」

「い、いや、別に思つた通りだよ」

ジロジロ見ていのがバレたのか、彼女は可笑しそうにこちらを覗き込んだ。彼女の三つ編みがたおやかに揺れ、やや上田遣いの顔に思わず心臓が跳ねる。普段は超然としてわかりづらさが、こうして見ると更科御影は普通の女の子で、どちらかと言えば可愛い方だ。

「本当は拷問器具でもあるんじやないかと思つたでしょ？」

「まさか」

思いました。

「大丈夫ですよ。普段は仕舞つてありますから」

「あんのかよつ！」

押入れを開けてアイアンメイテンが顔を出す光景を想像し、俺はたまらずゾッとした。

「冗談ですよ」

「からかうなよ……」

更科が悪戯に笑つた。彼女が言つと本当に聞けてしまつから困る。

「ところで、今夜ここに橘さんを連れ出したのは他でもなく今後の方針を伝えるためなんですけどー……」

何を思つたか、彼女は舐めるような視線で俺の全身を見始めた。

「な、なんだよ……そんなに見られると落ち着かないんだが……」

まるで品定めされているようで妙な気分だ。まさか取つて食おつってわけじや……。

「体も服も、ちょっと埃っぽいですね」

「……へ？」

彼女の言葉に俺は自分の体を確認した。見ると頭髪も衣服も確かに汚れている。そう言えば、さつきくぐつた抜け穴はお世辞にも綺麗とは言えなかつた。その前の泥濘で靴も泥まみれだし、肩には蜘蛛の巣のような物まで付着している。

「このままじやなんですから、お風呂、入っちゃつて下さい」

「……は？」

満面の笑みで告げた彼女に、俺は冷や汗が額を伝つを感じた。
「IJの個室には風呂があるのか？ 空姫たちの部屋にはなかつたと思つけど」

「まさか。そんな贅沢できませんよ」

彼女はあっけなく否定する。いくら元が御曹司のための別棟とはいえ古い建物だ。時代もあり、個室に浴槽がないのは当然だらう。だからその、つまり……どうこうことだ。

「うちにある共同風呂を使って下せ。大丈夫ですよ。この時間は誰も使用しませんから」

その提案に、俺は危うく人生初の卒倒を体験するところだった。

「うちの浴室は時間が決まってるんです。使用時間は夕方の六時から八時半まで。九時には鍵が掛かりますから、今なら大丈夫です」

「だったら鍵が掛かってるんじゃないのか」

「そこは問題ありません。何せ最後に鍵を閉めるのは寮長である私のですから」

相変わらず泰然自若の笑みに脅され、俺は半ば強引に一階の浴室を訪れていた。部屋を汚すのは悪いとは思うが、いくらなんでも女子寮の風呂に入るなんて……。

「……見つかったら、間違いなく逮捕だらうな」

誰もいない脱衣所に溜息が溢れる。中には衣服籠と棚が並び、見た目はごく一般的な銭湯だ。これを女子七人で使用しているというのだから贅沢な話である。男子棟の天野は一人頭に許された入浴時間は最大十五分と嘆いていた気がする。数が多いとそれだけ時間配分も厳しい。上級生との上下関係も考えると一年男子はせいぜい十分がいいところか。その点、一年だけの女子は遊々と入浴できるわけだ。

「普段は空姫や乾も使ってるんだよな、じーじ……」

いかんいかん。けしからぬ妄想を頭を振つてかき消す。というか今はまだ九時。ついさっきまで彼女たちがここを使用していた可能性が高いわけでつまりそのあれだ。この状況は毒なのだ。

この時間は誰もやってこないとはいえ、どうにも落ち着かない。さつさと入つて、さつさと出よつ。

衣類を籠に放り込んだ俺は、思つたより自分の体が泥だらけであることに気付いた。

「つたく、あのルートは一度と使わないからな……」

元はといえば全て更科のせいだ。俺は悪態を吐きながら、どうにも人を従わせる才能に長けた彼女に今後何を言われようと心に決め、

最後の衣服を投げるようにならに籠に入れた。

「あ……」

神子と田が合つたのは、その時だった。

しまつた。

外からの侵入者がいないからといって油断していた。当然脱衣所には鏡がある。そして鏡ある所に神子あり。彼女は鏡の中の置張りに座りながら、目を点にしてこちらを見ていた。

「な、な、な、な、なんじゃそれはあッ！！」

顔を茹でダコ色に染めた神子が指をさし叫んだ。今にもちやぶ台をひっくり返そうな勢いで、彼女が同様の最中にいるのがわかる。

「それとは何だ！ それとは！ つてか指をさすなあ！！！」

咄嗟に空いていた籠で体を隠した俺は、その場に縮こまつて抗議した。油断も隙もありやしない。まさかこんな場所で俺の全てを覗かれてしまうなんて！

「うるさいたわけっ！ うつけ者！ 不躾者っ！」

リモコンやらお茶菓子やらを無数に投げつけながら、神子が嚇怒している。投げられた物は次々と鏡に当たり、こちらには届くことなく全てが床に落ちた。

「不躾者はどつちだよっ！ 男子高生の着替えを風呂場を覗くとかどんな神様だ……」

「うるさい！ 神格であるわらわになんて卑猥なものを見せつけるのだ！ お前の様子を見に来てみれば……まったく」

「いいから早く帰れよ！ おちおち風呂にも入れないじゃないか！ 脱衣籠で下半身を隠すという情けない体勢のまま必死に抗議する。神子はふくれつ面を背けたまま、その場を消える気配がない。

「なんだよ、用があるんなら後に」

「あの女とは……どういう知り合いなのだ」

不機嫌さを如実に醸し出した声で神子が呟いた。

「あの女って、誰のことだよ」

「とぼけるでない！ 昨日一緒にいたのことだ」

一緒にいた？ 神子と話している場に居合わせた人物といえば
「更科御影のことか？」

質問の意図が掴めず、俺は素つ頓狂に返した。昨日あろうことか
学校の男子トイレに現れたのは更科ただ一人だ。それを聞いた神子
は、相変わらずむすっとした顔で視線を合わせようとしてない。いや、
こっちを見ないのは別の理由かも……。

神子が何も答えようとしないので、仕方なしに俺は続けた。

「この女子棟の寮長さ。弱みを握られてあれこれ従わされてるんだ
よ」

「……………そ、うか。ふん、なんて非道な女じや」

「お前が言つのか！」

退学という弱みをちらつかせて、乾や空姫の願いを叶えさせよう
としてる奴にだけは言われたくない。

「わらわは……ただ取引をしているだけじや。今日もその進捗を聞
こうとしたのに、とんでもないものを見せられて、その上文句を言
われていては不愉快じや」

「不愉快と言われましても……」

「俺の羞恥心はどこへ？

「ど、とにかく。わらわの願いは絶対叶えてもうからな。忘れる
でないぞ」

そう言い残して、神子は鏡からふと消えてしまった。何やら更
科について突っかかつっていたがどうしてだろうか。

「しつかし、疲れたなあ……」

今日も昨日も散々な目に遭つた。加えて今の騒動だ。気疲れも肉
体疲労も度を越して、広い風呂にでも入らなきゃやつてられん。

色々と不服はあるが、俺は気を取り直して浴場への扉をガラガラ
と開けた。途端に中から湯気が濛々と立ち込め、わずかばかりの塩
素の匂いが鼻をついた。

「いい浴場じゃないか。これなら金も取れるぞ」

銭湯よりは狭いが、学生寮のそれにしては十分すぎる広さだ。洗

面台も数多く設置されているし、内装もタイル貼りではなく大理石。この大きな浴槽に浸かれば疲労もすぐに吹っ飛ぶだろう。さすが元御曹司の御用達。これが自由に扱えるのだ。もし男子寮生にこれを見せたらさぞかし嘆くんだろうな。

早速洗面台で汚れを落とした俺は、大きな期待を胸に、お湯の中に身を沈めた。

「やばい……極楽だ……」

なんとも脱力した声が出た。絶妙な湯加減。自宅のそれとは比べ物にならないほど広い浴場。体をめいっぱい伸ばせる解放感に身を任せながら、俺はゆっくりと目を閉じた。

想像すれば、普段からこの浴室を使う、麗らかな女子生徒たちの黄色い声が聞こえてくる。

「つたく、なんだってこんな季節に暖房が故障するのかしら。しかも私たちの部屋だけよ！ 信じられる？ おかげで服も体も汗だくよ」

「まあまあ桜子。特別にお風呂に入れて貰えたんだからよしとしようよ。その間に寮母さんが元栓を止めてくれるって言つじ

「うわ、下着までびしょびしょ……それにしても、あの寮長がよく時間外の使用を許したわね。後で何か要求されるんじやないかしら」

「人の親切心は素直に受けなきや」

「涼子はお人好し過ぎるのよ！」

終わつた。

疲れがふつとんだという事実さえふつとんだ。

脱衣所から明らかに聞き覚えのある女子二名の声が聞こえた。そ うだよ乾。あの更科御影が単なる親切心で動くはずがない。……全 部仕組まれたんだ。

いや落ち着け俺。まだ殺されると決まつたわけじゃない。どこかに打開策があるはずだ。探し！ 何としても探し出すんだ！

「そうだ窓から逃げよう

そう思つた俺は咄嗟に天井を見上げた。天井付近に窓があるがと

ても登れる高さではない。第一空調用の窓だ。人が通れるほど開く保証もない。

「……くつ、そこのドアは！」

ボイラー室と書かれた扉に手を掛けたが、開かない。ガチャガチャと必死に捻つてみるが、無情にもその扉には鍵は閉まっていた。「かかる上は、あいつらが出るまで湯船の中に」

だが俺は思い直した。そんなに長い間息が続くわけがないし、そもそも彼女たちが湯船に浸からないことが条件だ。色のついた温泉でもない。透徹した湯はちょっと近付いただけでその中の人物に気付いてしまうだろう。そしてその先に待っているのは。

「あの寮長。いつか尻尾を掴んでやるわ。このまま戦々恐々としていられるかつての」

ガラガラと乱暴に浴槽の扉が開かれた。

「それで友達になれたらいいのにね」

「ならないわよ！」

いつも通りの調子で言い合いながら、乾桜子と空姫涼子は浴室に足を踏み入れた。

おそらくは当然、一糸まとわぬ生まれたままの姿で。

俺は咄嗟に浴槽の陰に隠れていた。彼女たちの入ってきた扉とはちょうど反対側。原始的な隠れ方であるがここが唯一の死角だ。だがそれも、彼女たちが扉側の洗面台を使用するという条件に限りだ。半分よりもこちら側に来れば、たちたち同様に一糸まとわぬ俺の姿が見つかってしまうだろう。だが殺されるのは俺だけだ。女子の裸を見ていたら犯罪。男子は裸を見られても犯罪だなんて男女不平等もいい加減にして頂きたい。

「ホント、お風呂だけはまともな寮ね」

「桜子の施設はこんなじやなかつたの？」

「まさか。うちはちょっと広い一軒家を改築しただけだから、お風呂も普通よ。一般家庭と大差ないわ」

蛇口を捻る音が浴場に響き渡る。シャワーお湯が彼女たちの肌を

打ちつけ、体についた汗を洗い流す。たつたそれだけの音で、ビックリしてこんなにも理性を犯されるのだろう。

心臓が限界値を超えて早鐘になつた。息を殺し、身を潜ませる。ちょっと覗いてみようかなんて好奇心を滲ませようものならそれが命取りになるだろう。それだけ危うい位置関係に俺はいた。

そのまま数分が経ち、彼女たちの立ち上がる音が聞こえた。ようやく解放されるのかと思いきや、水の跳ねる音が耳朵を打つ。二人が浴槽に入つたのだ。

二人分の体積で溢れたお湯が浴槽から溢れ、俺の体の上にかかる。それだけでもう俺は意識を失いそうだが、必死に堪えた。倒れて少しでも音を立てれば、あいつらは俺の方にやってくる。

「アンタ、一体どういうつもりなのよ」

何やら切り出しづらりと、乾が会話の水を向けた。

「どうこうって？」

「あいつのことには決まってるじゃない」

「……あいつって……ああ、京介のこと？」

不意に名前を出され、思わず声を上げそそうになる。なんていきなり俺の話をするんだよ。

「京介が、どうかした？」

「どうもこうもないわよ。あいつどうしようもない変態だし、スケベだし、どうしてあんな奴に近づくの？」

なんだと！ 確かに今の状況では否定しがたいが、こんな場所でなければ今すぐ断固抗議するところだ。

「セーラー服の件だつて、涼子は拾つたつて言つてたけど、あいつが持ち出したんじやないの？ あいつずいぶん私の制服にやたらと突っかかってきたし……私のファッションが気に食わないみたいだし」

「おい空姫。どうにかするつて言つておいて、勘付かれてるじゃないか！」

「まあまあ。京介も湧き上がる感情を抑えきれなかつたんだよ。そこに桜子が着てたセーラーがあつたからするするつと。思春期男子

の劣情くらい大目に見なきや」

まったくフォローになつてねええええええええ！

「制服盗まれて大目に見られるわけないでしょっ！ あいつ、そのうち下着まで持ちだすかも……」

そんな命知らずなことはしません。

「またまたー。うちの制服姿を美人だって言われてホントは嬉しかつたんでしょ？ すっかり顔に出てたもんねー」

「な、何つてんのよ！ あれは単にあいつの発言が気持ち悪かつただけよつ！」

グサ。

「実際、セーラーよりも似合つてたよ？ ビニからきた制服なのかわからないけど、せつかぐだから貰つちゃいなよ。京介もそっちの方が好きなんだしさ」

「なんであいつの好みの問題になるのよ！ 関係ないわよ、そんなのつ……」

「あらあら、また顔赤くしちゃつてー。可愛いなあ桜子は」

「つるさい！ これはお風呂にのぼせただけよ！」

「まだ一分も入つてないよ？」

「いいから！ 私はもう上がる」

そのまま乾は立ち上がり、ペタペタと脱衣所の方へ戻つて行つてしまつた。

結果的に空姫だけが取り残される。もちろん本当は俺もいるのだが、認識の上では彼女は一人になつた。

そしてポツリと、水音にさえ消されてしまいそうな声で彼女は咳いた。

「桜子は可愛いわよ。私なんかよりずっと……」

「……え」

いつもとはまったく違つ空姫の口調に、俺は無意識に声が出ていた。大敵である乾がこの場を去り、気が抜けていたところの不意打ちだった。

誰かいるの!?

当然、空姫は叫んだ。万事休す。今までの苦労が水の泡、風呂だけに……。

現実逃避はそれまでにして、俺は今一ぐいと立ち上がりた。もちろん、手で隠す。

空姫はこの前、男である俺の前でも平然と着替えていた。彼女の度量があれば、たとえ俺に裸を見られても平気なんじやないだろうか。ちゃんと事情を説明すれば乾に気付かれる前にここをやり過ごせるかもしない。

ある種の信頼を胸において、俺は空姫の前に姿を現した。

この前見た下着姿とは意味合いがまるで違う、隠れない彼女の肢体がそこにあつた。太腿辺りまでをお湯を浸し、そこから上は全てが晒されている。彼女は硬直していた。身動き一つせず、突然現れた俺を凝視していた。

「えっと……これにはわけがあつてだな」

「わざああああああああああああつ！」

それは甲高い、耳を劈く女性の悲鳴だつた。一般的な女性が男に裸を見られた時と全く同じ、一般的な拒絶反応。彼女は必死に腕で体を隠し、酷く怯えるような目でこちらを見ていた。

顔形は空姫涼子そのものだ。ただ反応が、明らかに予想に反していた。空姫も女の子だから当たり前だ。だがその当たり前がなぜか想定外すぎて俺の思考は混乱し、彼女の意外にも豊満な裸体から目を逸らすことさえ忘れていた。

「ル・リ・エ・ル」

「来ないでつ！」

しょうがないなー京介は。また寮長だね。

「だからこれには事情が！」

「近寄らないでよつ！ 近寄るなあああああああつ！」

まったく。桜子は僕が上手く引きつけておくから、その好きに逃げるんだよ。

思い描いた空姫涼子は、苦笑していた。さすがにちょっとだけ照れくさそうにしながらも、まるで子供の失敗を見守るような目で俺を見ている。

だが田の前にいる空姫涼子は、泣いていた。見ず知らずの暴漢に出てわした一般的な女性の精神状態で、いや、それを少し通り越してしまつほど取り乱した様子で、金切り声を上げている。

「何事よ…」

騒ぎを聞いた乾が、扉を開けて駆け込んできた。

咄嗟の出来事で油断していたのか、彼女もまた一糸まとわぬ姿だった。

「あ、あ、あああアンタ一体何してんのよつ！」

「いや、待て、これには仕方のないわけが！」

乾は空姫よりも女性らしい裸体を咄嗟に隠し、顔を真っ赤にしてわなわなと体を震わせている。

「見損なつたわ……制服は盗んでも涼子の着替えを鼻の下伸ばして見てても、覗きまではしないと思つてたのに……」

例の黒々としたオーラを纏いながら、彼女はその拳は強く握り締めた。気持ちはわかるけど、腕一本じや隠し切れてないからね……。

「女子寮の浴室に男子が潜入して仕方のない理由が

鬼気迫る表情で乾が全力で向かってくる。ああ知つてます。その拳を喰らつて俺が気絶しなかつたことはないからな……。

「一体どこの世界にあるつていうのよ…………ツ！」

その後は大体、皆様もご想像の通りである。

眉間への激しい痛みで目を覚ますと、目の前に見覚えのある天井があつた。一段ベッドの上段である。

「気が付いたようですね。よかつた」

すぐ傍で淑やかな声が響いた。椅子に腰掛けた更科が読んでいた本を机に置き、心配そうな顔つきでベッドまで近寄つてくる。彼女はいつの間にかパジャマに着替えていた。薄水色の布地は寝間着なだけあつて薄っぺらだ。三つ編みも解き、ややウェーブ掛かつた黒髪が肩越しに広がっている。艶かしさを持つたその姿に、俺は思わず視線を逸らしてしまった。

「だいぶ強い衝撃を受けたようですが、大丈夫ですか？」

「痛いけど……もう慣れたよ」

三度体験したノックアウトには笑うしかない。だが先程の正拳突きが今までで一番痛かった。あの状況を考えれば必然なのだが、ものはや五体満足であるだけ幸運とも言える。あれは本気で殺しに来る剣幕だった。

「ところで……、あれから俺はどうしたんだ？」

浴場で気絶したのでその後の展開がわからない。乾や空姫がどうしたのか、俺はなぜここにいるのか、俺に服を着せたのは誰なのか。「浴室で倒れているところを発見して、私がここに連れてきました。着替えは鞄の中の物を拝借させて頂きましたが、何か問題でしたでしょうか？」

「か、鞄を勝手に覗いたことより問題な出来事があるような気がするんだが……」

想像したくはないが、俺はこの一日で四人の女性に裸体を晒したことになるのか……もはや悟りを開けそうな気分だぜ。しかし本人が何も言わないのだからここはあえて黙つておこう。

「体を拭いたのは私の手じゃなくてタオルですから大丈夫ですよ」

「一番触れられたたくない問題をさらつと言つなかつ！」

更科の顔色がまったく変わらないのが釈然としない。とことん異性としては見られていないようだ。

「お一方には事情を説明してちゃんとおきました。裸身を見られた件に関してはひどく憤慨していましたが、今回は通報せず不問にするそうです。これも橘さんの人徳ですね」

思つてもないことを朗々と語る更科。これが人徳なら全国の覗き常習犯は今頃きっと解脱してるな。

「俺には公権力には任せず、自ら鉄槌を下すという意味に聞こえるんだが……」

撲殺され、山道の外れに埋められる光景が脳裏をよぎる。土の布団ではさぞかし感触も悪かろう。

「そうでしょうか。羞恥から来る怒りと恥じらいから来る照れ隠しは違うと思いますけど」

「あの拳が照れ隠しかよ。慰めるならもうと現実的な嘘を言つてくれ」

「まあ……本人がそれなら結構ですけどね」

何やら含みをもたせた言葉で、彼女はその話題を締めた。

「ところで、空姫涼子さんに関して何か情報は掴めましたか？ せつかく絶妙な場を設けて差し上げたのですから、まさか一人の胸のサイズだけが収穫だなんてことはありませんよね」

これまでの淑女然とした態度とは打つて変わり、交渉の場に立つきゃりアウーマンのようなトーンで彼女が言った。

「つて、やっぱり全部君が仕組んだんじゃないか！」

「仕組んだなんて人聞きが悪い。お膳立てと言つて下さい。それでどうです？ 何か情報は？」

急き立てる彼女に、俺は一瞬、黙り込んでしまった。

「……わかつた、ような、わからなくなつたよ……」

あの場での空姫の悲鳴は想像だにしていなかつた。彼女は紛れもなく女の子だけど、いつもはもつとサバサバした性格だつた。それ

がまさかあそこまで取り乱すとは。

「あら、煮え切りませんね……。まあいいでしょう。わからないことがわかつただけでも収穫と言えます」

「わからないことが……か

古代ギリシャのおっさんみたいな言葉だ。だが現実として、空姫の本当の姿も、月島神社で彼女がしたという祈願の意味も、俺にはまったくわからないのであつた。

出会いつてまだ一週間……当たり前すぎる事実が、今ではすぐもどかしい。

「ところでもう夜も遅いですし、今日のところは寝ましょつか

「はい？」

さりげなく言つた彼女に俺は素つ頓狂な声を返した。確かに彼女の床に就く体勢は万全だが、寝ましょつかと言われましても。

「詳しい作戦は明日練りましょう。夜更かしは体に毒ですからね」

部屋の電気を豆電球に変えた彼女は、何を思ったかそのまま眼鏡を外し、俺の寝ている布団に入り込んできた。

「ちょっと、何してんだよ

更科の体が密着し、柑橘系の匂いが鼻腔に広がる。一般的な女子生徒よりは主張の少ない体型だと思っていたが、こつして見ると男にはない丸みがそこかしこに見られた。この女子寮の部屋はどこも簡素で女つ気がないのに、住人は立派に女性なのだから始末が悪い。「上のベッドは物置として使用していますし、床に寝るわけにもいかないでしょ。ここには一つしか布団がないのですから、共用するのが必然です」

「必然つて なんで俺もここで寝る前提なんだよ！ 他にも部屋は空いてるんだろ？」

そうだ。現在この女子棟の住人はたつた七人。部屋はいくらでも余っているはずだ。

「普段は誰も使っていないのですから、使用した痕跡が残れば怪しまれます。それに空き部屋は放置されたままですから、埃だらけで

とても住めたものじゃありませんよ？」

眠たそうな目で彼女が布団に潜り込む。逃げ場を失つた俺は右往左往しながら壁際に難を逃れた。

「だからって一緒に布団に寝ることないだろ！　仮にも俺らは高校生の男女なんだぞっ！」

寮生の風紀をあれほど気にしていたのに、こんな不祥事が許されるはずがない。

「あら、私は別に平気です」

「俺が平気じやないんだ！」

「とにかく男として見られてないな。さすがに傷つくぞ。

「……私こう見えて夜更かしは苦手なんです。静かにして下さい」言いながら、既に彼女は微睡み始めていた。枕の上で目を瞑り、はつきりと睡眠の体勢に入っている。

「少しは気してくれよ！　寝ている間に襲われてたりびつするとか考えないのか」

必死な抗議も意に介さず、彼女は安心しきった顔つきで眠りに就こうとしている。

「……ですから……私は、平気……です……」

あつという間に彼女は寝入つてしまつた。動搖する俺の目の前に無防備に寝息を立てている。薄暗がりの中で目を凝らすと、不自然にボタンが外れたパジャマの隙間から、彼女の下着が見えそつだ。だがよくよく見ると、当然見えるべき部位に例の布地が見当たらなかつた。柔らかそうな膨らみがわずかに顔を覗かせるばかりで、隠されるべき場所が露になつていて。規則正しい呼吸と共に彼女の控えめな胸元が上下し、その都度俺の心臓が大きく脈打つた。顔を近づけ、覗き込んでしまえば全て見えてしまいそうだ。眠る時に下着を付けない女性もいるらしいが、まさか……。

「落ち着け……これは奴の作戦だ。俺が何か行動を起こしたらすぐ現場を押さえて、生涯脅すつもりなんだ……」

脈打つ鼓動を手で抑えながら、これまでの彼女の行動ができるだ

け平静に分析する。だが冷静に観察すればするほど彼女が完璧に熟睡しているようにしか見えなかつた。まるで襲つてくれと言わんばかりに布団がずれ、首筋から胸元にかけての扇情的なラインが無防備に晒されている。しかも先程より上着が大きくはだけており、この状態からでも全てが見えそうだつた。彼女がこちら向きに眠つてゐるから、余計にちらちらと視線が行つてしまつ。騙されるな京介。これは演技だ！

ともすれば理性を失つてしまいそうな窮地を必死に堪え、何度も頭を振る。しかしこのまま一晩を乗り切るのは絶対に不可能だと感じた時、俺はとあることに気が付いた。

「ベッドから出ればいいじゃないか」

ポンと手の平で拳を叩き、俺はそつと危険地帯を抜け出した。物音を立てぬようそつと布団を出たのだが、その際に彼女の眉がわずかに歪んで見えたのは氣のせいだろうか。

「しかし、これからどうしたものか」

静寂の中、時計の音が一定のリズムを刻んでいる。ここは夜中の女子寮。例によつてセキュリティは万全なので外に出ることはできない。先程侵入した窓から逃亡するという方法もあるが、更科が切つたというセキュリティが復活していないとも限らない。このままこの部屋でじつとしているのが一番の得策なのだが、何せこの状況下だ。布団の中の更科が寝言で色っぽい声でも上げようものなら、俺の退学・逮捕街道は思春期のロマンに向かつて一直線だ。それこそ一番危険な選択肢に他ならない。

しかし部屋の外に出てどこに行こうといふのか。男子生徒の俺がここにいることを知つてゐる住人は、そこにいる更科と、あの二人だけだ。

「……空姫」

不意に浴室での彼女の言動が蘇る。怯え切つた彼女の表情と、明確過ぎる拒絶。

普段はあれほど飘々とした空姫だ。予想外の反応に傷つかなかつ

たと言えれば嘘になる。

だが、それ以上に彼女は傷ついた。

彼女の涙が目に焼き付いて離れない。体を見られたことだけではなく、何か「女性であること」そのものを目撃したことで、あれほどまでに彼女を動転させてしまったような気がする。

なぜそうなったのかはわからない。彼女が今どんな精神状態でいるのかも見当がつかなかつた。しかし何一つわからなくとも、すべきことは確かにある。

「……謝りに行くか」

果たしてそれが今というタイミングなのかはわからなかつたが、この機会を逃して謝りそびれるのが一番怖いし、駄目なことだ。大きく頷いて、自らに決意を促す。そつと立ち上がつた俺はそのままドアへと歩き、ゆっくりと扉を開けた。

「やつと出てきたわね。この変態覗き野郎」

暗がりの廊下で、乾桜子が腕を組んで仁王立ちしていた。

鬼の形相で、彼女がこちらを睥睨している。この女子生徒に何度も氣絶させられたことは、さすがに体が覚えていた。本能的に恐れを抱き、俺はゆっくりとドアを閉めようと

「何も言わずに閉めるな縊り殺すぞ」

したところを素早く押さえられた。

「……いや、言いたいことはわかつてゐる。わかつてゐるから落ち着いてくれ」

観念して俺は廊下に出た。寝てゐる更科を起こすわけにも行かないし、目覚めて最初に見た物が自室に横たわる男子の死体だったら寝覚めもさぞ悪かろう。

「意外に従順で助かるわ……できるだけ苦しまないように送つてあげる。大丈夫。十分もすればきっと自分から殺してくれつて懇願するから……」

言つてることが完全に矛盾している！

彼女がバキバキと拳を鳴らしている。もはや楽器だねこりや。吹

奏楽部にも入ればいいんじゃないかな……。

一瞬で……できることなら一瞬で。俺は覚悟を決めて瞑目した。

思えば高校生活に限れば波乱に満ちた人生だったな。たった一週間ちょっとだけ。

「…………と言いたいところなんだけど」

彼女は握っていた拳を細腰に当て、至極殘念そうに溜息を吐いた。

「…………許して、くれるのか？」

思わず僕の胸をなで下ろす。助かった。生きてるって素晴らしい。

「許したわけじゃないわよ。一応寮長から名田上上の理由は聞いたし、意図して浴場に侵入したわけじゃないなさそうだから執行猶予を残しただけ」

あくまで殺意を持った目で彼女は俺を睨んだ。執行はいはずれされるのね……。

「…………それに……」

乾は何か言ひづらそうに視線を落とした。

「あの子の様子が、ちょっと変なの…………」

心臓の脈打つ音が聞こえた気がした。

「…………あの子って、空姫のことか？」

乾は無言で頷いた。ある程度は予想していた。だが聞くのが怖くもあった。空姫は今、どんな精神状態なのか。

「別に普通にしている時は普段と変わらないの。会話してもいつもお気楽な調子だし、あの子も寮長から話を聞いたから、アンタが覗くつもりでそこにいたわけじゃないことも知ってる。でも…………」

乾は決して滔々とは語らなかつた。頭の中で言葉を選んでいるように見える。

「時々、上の空になるのよ」

「上の空…………？」

「会話の途切れた時とか、ふと一人とも無言になつた時に、落ち着かないっていうか、そわそわしてるの。それには、何だか色々と定

まらない様子なのよ」

「定まらないって、どういう意味だ？」

判然としない物言いに顔を顰める。

「なんて言えばいいのかな……突然口調が女の子らしくなったと思つたらまたいつも言い方に戻したり、お気楽な言動をしてると思つたら急に気弱になつたりするの。それと……一人称が定まらない」「一人称が定まらない？」

「もしかして、僕じゃなくて私って使うとか？」

その言葉に乾は目を丸くした。図星のようだった。浴場での空姫の独り言は聞き間違いじゃなかつたのだ。

「そう。それどころか急にアンタみたいに俺なんて使い出したり、人格が定まつてないのよ。そんな涼子初めてだから、私不安で……」事情を話している間、乾は終始落ち着かない様子だつた。そわそわと視線を泳がせてみたり、自分の指をコツコツと叩いてみたり、ルームメイトが心配で堪らないという心情が伝わってきた。

「わかった。俺が行つてみればいいんだな」

「……お願いできる？」

話に聞く空姫も不安定な状況だが、乾自身も弱っていた。いつになく気弱な態度で俺に接しているのがわかる。

正直言えば俺も怖かつた。そんな状態の空姫は想像がつかないし、何よりその事態を作り出したのが俺自身であることに重圧を感じる。けどだからこそ、俺は行かなくてはならなかつた。

「……ところで」

すると急に彼女が態度を変えた。どういうわけか訝しげに俺を眇めている。

「な、なんだよ……」

彼女はますます不審そうな目つきで、眉をひくつかせている。

「アンタ、寮長と二人っきりで何してたの？」

「…………は？」

「は、じゃないでしょ？ こんな夜中に年頃の男女が部屋を暗くし

て、一人つきりで何をやつてたかって聞いてるの…

「な、何つて、何もないに決まってるだろ？……」

何かしそうになつたけど、俺は耐え切つた。ペンキ塗りたてのベンチもビックリの潔白だ。触ると怪我するぜベイベー。

「ふーん……本当かしら」

不機嫌極まりない面持ちで、彼女がまた俺を睨む。決してよい居心地ではなかつた。

「だ、大体、何かあつたといひお前には関係ないだろ！」

「はあ！？」

二人とも思わず大きな声を出してしまい、慌てて自分の口を押さえる。幸い、他の住人が起き出していくような気配はなかつた。

「私だつて、アンタに裸見られたんですけど……」

今度はボリュームを抑えて彼女が言つた。見ると照れくさそうに顔を少し背けている。言葉にされてしまうと浴室で見た光景がありと蘇つてしまい、俺もまた恥ずかしさが込み上げた。

「でもあれは事故で、元はと言えば更科のせいで……その、見られたのはお互い様だし……」

「何言つてんのよつ、アンタは見せつけたんじょつ？ 私のは見られたの！ 体の隅々まで視姦されたのよつ……！」

「見せつけてないし視姦もしてないからッ！」

声を抑えつつも、精一杯に否定する。このまま変態野郎にされたまるか！

「どうだか……。誰にも見せたことなかつたのに……しかも同時に

「人も裸見て、一体どつちに責任取るつもりよつ？」

「責任つて……一体どつすればいいんだよ」

「それは……その……」

急に乾が口ごもる。もぞもぞと体をよじり、何やら胸を手で隠すように覆つている。

「この件が済んだら……私とその……最後まで……」

消え入るような言葉で、なぜか彼女は泣きそつた。下を向く、

その表情は窺い知れない。

「寮内での淫行は許しませんよ……」

「うわっ！」

背後の声に驚いて振り向くと、ドアの隙間から更科が顔を出していた。気のせいか恨めしそうな視線を乾に向いている。

「い、淫行つて、一体何を言つているのかしら寮長……」

慌てながら乾は明後日の方向を見た。悪さを見つけられた子供のように、バツが悪そうな態度だ。

「それにこの男は据え膳を食わぬ臆病男です。たとえあなたが思い切つてこの場で全裸になったとしても、何も起きやしませんよ」

どうも罵倒されているような気がした。それに先程からチクチクと更科の視線が突き刺さっている。

「へ、へー。でもどうかしら。それはただ単にその据え膳に魅力がなかつただけじゃないの？」

誰かの血管の切れる音が聞こえた。

「乾さん。それはどういう意味でしょつか？」

「どうもこいつも、私は事実を言つたまでよ。その据え膳さんは見たところBもあるかないかだし、誰とは言わないけどEの据え膳なら結果は違つてたかもよ？」

「……でかけりやいいつてもんじやないです。私のは形重視です」「現実逃避してるところ悪いけど、世の中には大きくて形がよいのも存在するのよ？」

一体何の言い争いなのかさっぱりわからないが、この場を逃げ出した方がいいことははつきりとわかつた。

俺は気付かれぬよう忍び足でその場を去ろうとした。だがその瞬間、背中に一人の剣のある声を突き立てられてしまふとする。

「『事が解決次第、はつきりさせてもらいますからね！』」

……何のこつちや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0335z/>

月島神子は覗いている

2011年12月2日03時03分発行